

はじめに

金鍾奭著『統一教会の分裂』（日本語訳）の虚偽のストーリー

UCI（いわゆる「郭グループ」）を支持する人々が、二〇一六年秋頃から日本で集会を行って広めている金鍾奭著『統一教会の分裂』（日本語訳）には、真のお母様をおとしめる「み言改竄」や「誤訳」が散見します。

まず、韓国語版の『統一教会の分裂』では、み言を継ぎはぎすることによって「み言改竄」を行っており、その真意を歪曲させています。そして、さらに日本語訳では、その文章を自分たちに都合の良いように悪意を持って「誤訳」しています。この『統一教会の分裂』（日本語版）は、340ページに及ぶ書籍ですが、内容は読む者をして、真の父母様に対する信仰を失わせるように巧妙に仕組まれていることに注意しなければなりません。そこに書かれた概要は、次のようになります。

統一教会の創始者（注、真のお父様）の子息のなかで、後継者に最もふさわしい人物は三男の顯進氏であった。彼は、自他が公認する統一教会の後継者であり（58ページ）、外貌から見ても創始者に似ており、性格も似ている。彼の登場は、統一教会が再強化される機会であった（60ページ）。学歴など、彼の能力は、父とは異なつて天の啓示にだけ依存しない合理的かつ理性的で、統一教会を復興させる希望を呼び起こすものだった（61ページ）。

また、顯進氏を支える郭錠煥氏は、公務の処理に厳格であり、立場を与えられても清廉な生活をし、公金横領が一切なく、模範的な人格者であった（87ページ）。

一方、四男の國進氏は、郭錠煥氏を要注意人物と考え、不正を暴露しようと画策したが（85～86ページ）、國進氏は嘘つきであり、創始者は彼の嘘に激怒した（90ページ）。

七男の亨進氏は、宗教性はあるが、自分の宗教性に頼り統一教会の伝統を歪曲することで統一教会のアイデンティティに混沌をもたらした（104ページ）。國進氏や亨進氏は後継にふさわしくない。にもかかわらず、彼らは顯進氏に代わって統一教会の後継の座に登場するようになる。その過程には、「パークワン事業に対する文國進の偽りの報告」があり（91ページ）、創始者を巻き込んだ訴訟まで起こした。これらの出来事は、顯進氏を追い落とすための陰謀であった（95～97ページ）。

その陰謀の背景に、「文顯進氏を危機として感じていた」（60ページ）第一世代の抵抗があり（80ページ）、かつ顯進氏の血統問題について言及し、創始者に影響を及ぼした韓鶴子（ハンハクチャ）がいた（116ページ）。文仁進氏の米国総会長の就任、二〇〇九年三月の束草事件も陰謀によるものであった（120、152ページ）。

陰謀が渦巻くなか、後継者を誰にするかについて、創始者の態度はハッキリしなかった（69～70ページ）。この創始者の態度が、統一教会に混乱を招くことになった。

また、韓鶴子は創始者の血統を疑っており（110ページ）、創始者に対して「不従順」であった（245～253ページ）。創始者はそのことに苦心していたというのが真相である。

創始者が他界した統一教会は危機を迎えている。創始者のアイデンティティが韓鶴子のアイデンティティによって否定され

ているためである（318ページ）。韓鶴子の他界後には多くの議論が予想される（319ページ）。しかし、創始者のアイデンティティを維持しながら、それを創意的に拡大しデザインしようとしている顯進氏によって、統一教会人を再活性化することができるようになるであろう（323ページ）。

以上が大まかな内容ですが、この本の問題は上記内容を裏付けしようとして、要所、要所で「み言改竄」や「誤訳」をしており、真の父母様の実体、お父様のみ言と食い違っている点です。この書が述べている内容は「虚偽のストーリー」です。

また、総論的な「韓鶴子の不従順」（245ページ）という項目では、お父様のみ言が十八個も引用されていますが、マルスム選集の原典に当たってそれを検証すると、全てのみ言が改竄されたものです。

この改竄行為は、真の父母様をおとしめるものであり、多くの人々の判断を誤らせる歴史的な「瀆神行為」であると言わざるをえません。

「真のお母様を中心に一つになる」ことが真のお父様の願い

——『統一教会の分裂』の内容は、反対派の言説と酷似

『統一教会の分裂』では後継者を誰にするか、創始者の態度はハッキリしなかった（69～70ページ）と述べますが、事実とは違っており、お父様のご意思は明確なものでした。

お父様は、「先生が霊界に行くようになればお母様が責任を持つのです。その次には息子・娘です。息子がしなければなりません。息子がいなければ、娘がしなければなりません。後継する者が誰だということは既に伝統的に全て（準備が）なされ

ています」（マルスム選集318～260）、「私（注、お父様）がいなくても、お母様の前に一番近い息子・娘が第三の教主になるのです」（マルスム選集、202～83～84）と明言しておられます。

このように、お父様は後継に関する「秩序」をハッキリ語っておられ、まず、「先生が霊界に行くようになればお母様が責任を持つ」ということであり、次に「息子・娘」ということです。そして、注目すべき点は「息子がいなければ、娘がしなければなりません」と語っておられる点です。このように、お父様は、相続者としての「後継」の問題について、明確にその秩序を述べておられます。

さらに、「先生が一人でいても真の父母様の代身であり、お母様が一人でいても真の父母様の代身です。『レバランド・ムー」が古希を過ぎて七十を越えたので後継者が現れないのか？』そんな言葉はやめなさい。……先生が第一教主、その次に、お母様は第二教主だということです」（マルスム選集、201～126）とも明言しておられます。

ところが、二〇〇〇年三月三十一日、原理研究会世界会長に顯進様が就任し、その関係者が顯進様をお父様よりも前面に押し立てて報告するようになると、お父様は同年五月三十一日、「父の伝統に従って、母の伝統に従って、三番目に息子である。それを知っているの？……母の伝統を立てる前に息子の伝統を立てることができないことを知っているの？」（マルスム選集323～83）と語られ、父と母が立てた伝統に従って息子が伝統を立てるように忠告しておられます。このように、お父様のご指導は明確なものであった事実を知らなければなりません。

ところで、『統一教会の分裂』を読んで懸念するのは、そこ

に書かれた主張が、いわゆる反対派の「真の父母」を不信させようとする統一教会批判と驚くほど酷似している点です。日本統一教会では、信者に対する拉致監禁を伴った強制的脱会説得事件が長年にわたり起こってきました。

その際、反対牧師、反対弁護士、ジャーナリストらがその後にあつて父兄たちを教唆するなど、脱会説得事件に関わってきました。一九九三年三月六日の山崎浩子さんの失踪事件の背後には、有田芳生氏や石井謙一郎氏らジャーナリストによる山崎さん入信スクープがあり、強制的な脱会説得事件の一翼を担った立場での報道がなされました（参考、太田朝久著『有田芳生の偏向報道まっしぐら』賢仁舎）。

『統一教会の分裂』に書かれた「ストーリー」は、反対派の一翼を担う報道をした石井謙一郎氏による統一教会批判と極めて酷似しており、石井氏の批判をわざわざ135ページで紹介しています。長年、統一教会の反対運動をしてきたキリスト教関係者をはじめ反対派が、統一教会を批判するUCIにすり寄って、その内部に忍び込み、天の摂理妨害に加担し、「工作」をしているのではないかと疑わざるをえません。

UCI（いわゆる「郭グループ」）問題の経緯

一九九八年七月十九日、顯進様が「世界平和統一家庭連合」の世界副会長に就任したことで、信徒の中には、顯進様がお父様の「後継者」であると考えた人もいました。しかし、家庭連合の教えは「**人類の真の父母は、永遠に一組である**」というものであり、人類の真の父母に後継者は存在しません。キリスト教が二千年間イエス様と聖霊を中心に歩んだように、天一国も、文鮮明・韓鶴子ご夫妻が、永遠に唯一なる「人類の真の父母」

であられるのであり、そういう意味で「真の父母」に後継者は存在しないのです。

二〇〇八年四月十八日、七男の亨進様が家庭連合の世界会長に就任した頃から、顯進様は真の父母様の指導や指示に従わず、別の動きをすることが顕在化するようになりました。二〇〇九年三月八日、韓国・東草で、お父様は顯進様に対して「全ての公職から退き、父母と共に生活しながら原理を学ぶように」、「GPFから一年間、休むように」と指示されましたが、顯進様は従わず、同年九月十日を最後に、真の父母様の前に姿さえ見せなくなりました。また、郭錠煥氏も二〇〇九年十二月を最後に、真の父母様の前に姿を見せなくなりました。

二〇一〇年二月、顯進様はGPF大会を開催し、それに対してお父様は再度、「GPF大会をしてはならない」と指示されましたが、その後も大会を強行していききました。

やがて顯進様は、二〇一〇年四月二十七日、家庭連合及びその関連団体の資産を管理するUCI（国際統一教会、Unification Church International）の理事会を乗っ取り、真の父母様の指導や許可を得ずに公的資産を売却し、定款も改定し、「国際統一教会、Unification Church International」の名称を単にUCIに変えて統一教会及び真の父母との関係を断絶させ、それを運営するようになりました。

そうした状況の中、二〇一一年五月二十五日、真の父母様は「真の父母様宣布文」を発表され、その中で、顯進様をはじめUCI理事陣（顯進様を中心とするグループ）に対し「即刻現職から退くこと。許諾なく公的資産を処分して得た全財産を返還せよ」と指示されたのでした。しかし、UCIはその指示を完全無視し、別行動を続けています。

なお、顯進様らが活動に用いている財源であった家庭連合及

びその関連団体の資産について、米国の裁判所が二〇一六年十二月二十三日、「GPFおよびその他の世界平和統一家庭連合と無関係のいかなる存在・組織へのどんな種類のどんな寄付をも禁じる」との仮差し止め命令を下し、UCI側の資産処分に歯止めをかけています。

ちなみに、『統一教会の分裂』は「顯進様は」創始者のアイデンティティを維持しながら、それを創意的に拡大しデザインしようとしている」(323ページ)と述べますが、この小冊子を読めば分かるように、顯進様の説くアイデンティティは、お父様が語られるアイデンティティと、ことごとく食い違ったものになっています。

お父様は二〇一〇年七月十六日、顯進様に従おうとする故・神山威氏^{たけ}に対し「(顯進は)もう、ずっと前に離れたんだよ、十年前に」、「顯進は先生と同じ方向に向いていない。逃げ回っている。顯進が先生の方方向に来なければならぬんだよ」、「なぜ先生に質問しないで顯進の方にいくのか」と語られました。

お父様が「逃げ回っている」と語られたように、お父様は何とかして顯進様を教育しようとしておられたに違いありませんが、教育できないままに、お父様のアイデンティティと異なることを平然と述べる「統一教会の党派(分派)」になってしまったことに対して、深く心を痛めざるをえません。最近では、「家庭平和協会(FPA)」という組織を立ち上げ、「FPAは、創始者が世界平和統一家庭連合を通して実現しようとしていたものを目標としている」(314ページ)と平然と述べるなど、分派の動きを強めています。

私たちはこの小冊子を熟読することでUCI問題の本質を理解し、UCIを支持する人々が流す真の父母様から離反させようとする「虚偽の情報」に惑わされることがないよう十分に

注意する必要があります。

なお、UCI(いわゆる「郭グループ」)問題について総合的に理解し把握するためには、「真の父母様宣布文サイト(<http://trueparents.jp/>)」の掲載文や映像をごらんください。

文責：教理研究院

注、本文中の真の父母様のみ言や『原理講論』は、網掛けで区別しています。

目次

はじめに／1

一、UCIによる真のお母様をおとしめるみ言の改竄／6

(1) み言の意味を反対に翻訳／6

(2) 「独り娘」は、お父様のみ言／8

(3) お父様の「アベル女性UN創設大会」での叱責について／8

二、UCI問題の解決を願って開設された「真の父母様宣布文サイト」／9

三、UCIを支持する人物による「教理研究院の『分派による御言葉改竄の問題(1)』に対する反論(1)」への応答／11

(1) お母様は、三十八度線(国境線)の向こう側にいるとする恣意的解釈／11

(2) このみ言が語られた頃の摂理的な背景／12

四、UCIを支持する人物による「アベル女性UN創設大会のみ言——教理研究院の『分派による御言葉改竄の問題(1)』に対する反論(2)」への応答／15

五、UCIを支持する人々が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴く(1)／21

(1) 「最終一体」宣言後の真のお父様の認識は、天地人真の父母定着完了／21

(2) 『統一教会の分裂』に書かれた「秘密文書」に関するみ言隠蔽／22

六、UCIを支持する人々が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴く(2)／27

(1) 真の父母の存在しない「One Family Under God」神様の下の「家族」の主張について／27

(2) 顕進様の「統一教会の伝統に関するアイデンティティの問題点」／29

七、UCIを支持する人々が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴く(3)／32

(1) 真の家庭を、真の子女様家庭としている誤り／32

(2) 三代圏の中心は真の父母様であって、真の子女様ではない／33

(3) 櫻井正実氏の「祝福家庭特別セミナー」の主張の誤り／35

(4) 「重生」は、真のオリーブの木であられる「真の父母」によってなされる／36

(5) 祝福家庭がアラインメントすべきは、「天の父母様——真の父母様」である／38

八、UCIを支持する人々が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴く(4)／41

九、UCIを支持する人々が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴く(5)／47

(1) み言を誤訳し、お母様にはトラウマがあったと思わせる／47

(2) マルスム選集の原典を読んで分かる真実／48

(3) 聖婚式はお母様の誇り／50

十、UCI(いわゆる「郭グループ」)側の「独生女」批判に関する見解／52

十一、アブラハム、イサク、ヤコブの論理の悪用について／53

一、UCIによる真のお母様をおとしめるみ言の改竄^{かいざん}

(1) み言の意味を反対に翻訳

UCI（いわゆる「郭グループ」）の中には、「お父様は、お母様がお父様の血統を疑っていることを、真の父母の分裂であり、越えるべき試練（三八度線）として指摘された」と述べ、真のお母様を批判する次のような文書を拡散する人がいます。

お母様にも話して見ると言うのです、むやみに暮らすかと。お母様も三八度線を越えなければなりません。あなたはあなたが行くべき道があり、私は私なりに行くべき道があるといっ
て行ってみるということです。分裂しました。一パーセント、〇・数パーセントの差があっても分裂するのです。天国の門に一緒に
に入らなければなりません。：（中略）：「先生は墮落の血統を相続したか、きれいな血統を相続したのか」と聞くのです。皆
さんはそのように言う自信がありますか。：（中略）：原理の解釈も出来ない人が何、先生が純潔^{マリア}か、何とか潔かと。私
がそれを知っているのですこの場に出てこないようにしました。そこに行かないようにしました。醜いことを知っているの
で、先生の血統が何、どうだど？ 墮落前に血統を汚したか？
（二〇〇九年二月二十八日）

このように、真のお母様が真のお父様の血統を疑っているかのように翻訳しますが、この翻訳はみ言の前後の文章を隠し、誤訳^ごを含ませて読者を誤導しています。

これに類似する訳文が、UCIを支持する人々が日本で集会

を行って広めている金鍾奭^{キム・ジョンソク}著『統一教会の分裂』にも記載されています（109～110、148、250ページ等）。

このみ言は、真のお父様が真のお母様を批判しておられる内容ではありません。文脈を踏まえて正確に訳せば、次のようになります。

「私」が神様の代身として純潔、純血、純愛の表象となつて鏡とならねばならないのに、（皆さんは）そのような鏡になっていますか？ 私たちのお母様にも話してみなさい、いいかげんに生きているか。お母様も三八度線を越えねばならないのです。「あなたはあなたの行くべき道があり、私は私の行く道がある」といつて行ってみなさい、分かれていたでしょう。一パーセント、〇・何パーセントの差が開いても分かれるのです。天国の門に共に入っていかねばなりません。墮落するとき、（アダムとエバは）一緒に墮落しました。一緒に追い出されたのです。地獄の底まで一緒に行つたのです。「先生は墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたのか？」ということです。皆さんは、そのようにいう（注、純血のこと）自信がありますか？ ……原理を解釈することもできない人々が、何、先生は純血か、何の血か。私はそれを知っているのです、この場に来ないようにしようと思ひました。そこに行かないようにしようと思ひました、汚らわしいことを知っているのです。何、先生の血が、どうしたのですか。墮落の前に、血を汚しましたか。……数多くの女たちが私をゴロツキにしようと、墮落させようとするので、（私は）鍵を掛けて暮らしました。お母様に尋ねてみてください。……うちの家で何代の孫の中で、お母様の代身として育ちうる孫娘がいつ生まれるか？ それが私の心配なのです。七代を経ても難しいだろうと考えるのです。

このみ言は、真のお父様が食口^{シッ}に対し「あなたがたはどういう立場に立っているのか」と尋ねておられる内容です。お父様は「純潔、純血、純愛」に関して食口の姿勢が間違っていることを『平和神経』の話をされながら指摘しておられます。『平和神経』は「純血」について語っているが、食口はそのような姿になっていないと語られ、その話の流れの中で「私たちのお母様にも話してみなさい、いいかげんに生きているか」と尋ねておられます。これは、お母様はいいかげんには生きているか、という意味で語っておられるものです。そして、「お母様も三八度線を越えねばならない」立場であることを前提に、真のお母様が「『あなたはあなたの行くべき道があり、私は私の行く道がある』といっただけでみなさい、分かれていたでしょう。一パーセント、〇・何パーセントの差が開いても分かれるのです。天国の門に共に入っていかねばなりません」と語っておられます。

この訳者は、ここで「分裂しました」と訳しますが、正しくは「分かれていたでしょう」です。つまり、自分勝手に行ったとしたら「分かれるでしょう」と言っているものであって、実際は「分かれていない」という意味で述べているものです。それを彼は正反対の意味に訳しています。

真のお父様は、「墮落するとき、(アダムとエバは)一緒に墮落しました。一緒に追い出されたのです」、だから天国に行くときにおいても一緒に行かなければならず、もしわずかでも違いが生じれば「分かれていたでしょう」と述べ、これは分かれていないという意味で語っておられるのです。

また、『先生は墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたのか?』というのです」と言っているのは、「先生は:」との

言葉で分かるように、お母様の言葉ではなく、食口が語っている言葉として述べておられます。

食口たちが、「先生は墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたのか?」と語っており、先生も純潔ではなく「六マリヤ」のようなことがあるかと思っているようだが、事実はそうではない。『原理を解釈することもできない人々が、何、先生は純血か、何の血か』と言っているが、とんでもない話だと言っておられるのです。

真のお父様は、その直後「数多くの女たちが私をゴロツキにしようと、墮落させようとするので、(私は)鍵を掛けて暮らしました。お母様に尋ねてみてください」と語られ、お父様がいいかげんになど生きているかとは、真のお母様が証人であると述べておられます。

このみ言のしばらく後で、真のお父様は「うちの家で何代の孫の中で、お母様の代身として育ちうる孫娘がいつ生まれるか?」

それが私の心配なのです。七代を経ても難しいだろうと考えるのです」と語られ、真のお母様ほどの女性は何代たっても現れないくらい、素晴らしいかただと証ししておられます。もし、お母様がご父様の血統を疑っておられるなら、お父様は、お母様が証人であると語られることはありません。七代を経ても現れないほど素晴らしい女性であると証しされることはありません。

この人物は、み言の文脈を無視して引用し、「誤訳」を含ませて、まるで「お母様がご父様の血統を疑っている」かのよう

うえて、『先生は墮落の血統を相続したか、きれいな血統を相続したのか』と聞くのです』とすること、あたかもお母様がお父様の血統を疑って問い尋ねているかのように訳し、お母様をおとしめています。このようなみ言の改竄、誤訳にだまされてはなりません。

(2) 「独り娘」は、お父様のみ言

『お母様批判』を拡散させる人たちの中には、み言を引用しながら真実をねじ曲げた主張をします。

伝統はただ一つ！ 真のお父様を中心として！ 他の誰かの、どんな話にも影響されてはいけません。先生が教えた御言と先生の原理の御言以外には、どんな話にも従ってはならないのです。今、先生を中心として、お母様を立てました。先生が霊界に行ったならば、お母様を絶対中心として、絶対的に一つにならなければなりません。今、お母様が行く道は、お父様が今まで立てた御言と説教集を中心として、行かなければならないのです。他の御言を述べるのを許しません。……どのような御言も、第二の御言を許しません！（祝福）一九九五年夏季号、68ページ）

彼は、このみ言を引用し、「お父様はお母様を中心に一つになれと仰っているが、その際お母様に対して……他の第二のみ言を語ってはいけないと仰っているので、原理と相容れない『独生女』論を語られるお母様を中心に一つになってはいけない」と主張します。この人物は、独生女（独り娘）のみ言が「第二の御言」であると断定します。ところが、「独り娘」については、

次のように真のお父様がみ言で何度も語っておられるのです。

神様の前において、『私は独り子だ』とイエス様が言われたのです。独り子が出てきたのに、独り子が一人で暮らしたなら大変です。独り娘がいなければなりません。それで、独り娘を探して、神様を中心として、独り子と独り娘が互いに好む場で結婚しなければならのです……それが『小羊の婚宴』です。（八大教材・教本『天聖經』176～177ページ）

「先生が教えた御言と先生の原理の御言」とは、具体的に言えば、マルスム選集と『原理講論』を指します。今まで「真のお母様宣布文サイト」に掲載したサンクチュアリ教会側の『お母様批判』に対する応答の中で、教会成長研究院は、独生女（独り娘）のみ言が「先生が教えた御言と先生の原理の御言」、すなわち真のお父様のみ言や『原理講論』と一致している点について、さまざまな観点から論じ、掲載してきました。

UCIを支持する人物の「お父様は……第二のみ言を語ってはいけないと仰っているので、原理と相容れない『独生女』論を語られるお母様を中心に一つになってはいけない」との主張は、誤りだと言わざるをえません。私たちはみ言に対する無理解ゆえに、自分の判断、主張が正しいとし、真のお父様の命じられた「先生が霊界に行ったならば、お母様を絶対中心として、絶対的に一つにならなければなりません」とのみ言を軽んじることは、あってはなりません。

(3) お父様の「アベル女性UN創設大会」での叱責について

『お母様批判』を拡散させる人たちは、「お父様は、聖和され

る五〇日ほど前に、お母様が自分勝手にやって、真の母が不在であると語られた」とし、「オモニを私が育ててきたよ。オモニはいません。文総裁の妻の位置もいけません。自分勝手にやっている!! 自分勝手に。ん。」(アベル女性UN創設大会)と真のお父様が真のお母様を叱責したかのように述べ、このみ言を「真の母の不在まで言及されている」として、お母様批判に利用しています。

かつて、同様の「お母様批判」をサンクチュアリ教会側も拡散していました。この批判への応答文は、『世界家庭』二〇一六年十月号および「真の父母様宣布文サイト」「サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りNo.2」15～18ページに掲載していますので、それを熟読していただければと思います。

真のお父様はアベル女性UN創設大会の講演で、真のお母様を、勝利した「真のお母様(チャムオモニム)」であると紹介されました。お父様は、勝利した「真の母」のような母(女性)がいないという意味で、聴衆に向かって、「母(オモニ)がいせん」と叱責しておられるのです。これは「真の母の不在」について語られたものではありません。今まで父なる神様だけを信じて、母のいない神様を信じてきたことを指摘しておられるみ言です。それを正反対の意味で用い、お母様批判に利用しているのです。

真のお父様はアベル女性UN創設大会の講演で、「勝利した世界的な女性代表である真のお母様に侍り」なさいと強調しておられ、真のお母様に侍ることで「真なる母の像、真なる妻の像を確立し、真の愛の運動によって理想的な家庭を結実させなければ」ならないと指導しておられたのです。

ちなみに、『統一教会の分裂』の表現はさらにひどいもので、「アベル女性UN創設大会で、創始者(注、お父様)が基調講

演をした。基調講演文を読んでいる途中、突然、創始者は韓鶴子に向かつて怒りを露わにしながら、お母さんを私が育ててきた。お母さんがいけません。文総裁の妻の位置もないのです。自分勝手にしています。自分勝手に! と韓鶴子に向かつて、立腹され原稿を読み上げた」(252ページ)と記していますが、真のお父様が真のお母様に向かつてこのような話をした事実はありません。事実をねじ曲げた、悪意をもった書き方です。

インターネットなどを通じてサンクチュアリ教会やUCIを支持する人々の情報が拡散していますが、これらの情報は、真のお母様や教会を批判するために自分たちの主張に合致する部分のみをことさらに引用したり、意味が正反対になるように誤訳をしたりと、巧妙に仕組まれています。私たちは、神様—真の父母様—私という中心軸をしかりと定め、このような悪意のあるみ言の引用、誤訳等にだまされてはなりません。

二、UCI問題の解決を願って開設された「真の父母様宣布文サイト」

UCIを支持する人々は、二〇一六年の秋頃から日本で集会を開いて、金鍾奭著『統一教会の分裂』の日本語訳本を広めています。

この本は、真のお母様が真のお父様に反逆しておられるかのように述べており、さらに、「最終一体」は条件的な約束にすぎず、お父様はお母様と一体化できないことに対し苦心しておられたかのように書かれています。また、誤訳やみ言の改竄も見します。私たちは、この誤った情報で、信仰が惑わされるようなことがあってはなりません。

真の父母様は二〇一一年五月二十五日に「真の父母様宣布文」を発表され、UCIを支持する人々の問題の速やかな解決を願われました。そもそも、「真の父母様宣布文サイト」も、真の父母様が発表された宣布文を掲載し、UCI問題の速やかな解決を願って開設されたものです。

そこで、UCIを支持する人々が、日本の祝福家庭や教会員に働きかけて活動をしている昨今ですので、まずは、宣布文サイトに掲載した「真の父母の絶対、唯一、不変、永遠性―真の父母を中心に一つになろう―」を抜粋して紹介します。

【以下、「真の父母様宣布文サイト」掲載文から】

私たち統一家は、真の父母様を中心として一つにならなければなりません。……アダムとエバが堕落せず創造理想を成し遂げていたなら、実現されていた世界（天国）とはどのような世界だったのでしょうか。『原理講論』には、次のように説明されています。

天国は神の本性相と本形状のとおり、個性を完成した人間一人の容貌に似た世界であるということを、我々は知ることができる。人間において、その心の命令が中枢神経を通じて、その四肢五体に伝達されることにより、その人体が一つの目的を指向して動じ静ずるように、天国においては、神の命令が人類の真の父母を通して、すべての子女たちに伝達されることにより、みな一つの目的に向かって動じ静ずるようになるのである。（69ページ）

……真の父母を通じて神様の願いが人々に伝達され、人類全体が一つの家族として相和合し、理想世界を実現していたのです。

その理想世界を取り戻すために、血と汗と涙の道を歩まれ、歴史上初めて真の父母として勝利されたおかたが文鮮明・韓鶴子ご夫妻です。

真のお父様は、次のように語っておられます。

「チャム・プ・モ（真の父母）」というその名（韓国語で三字）を考えると、真の父母によって歴史が治められ、真の父母によって新たな世界になり得る起源が生じ、真の父母によってサタンを屈服させ得る内的な因縁が結晶し、真の父母によって外的な世界を占領しているサタンを征服し、初めて神様を解怨成就してさしあげることのできる中心が結晶するのです。

それゆえ、真の父母と共に生き、真の父母の命令を受けて行動することのできる、この驚くべき恵みに、皆さんはまず感謝しなければなりません」（八大教材・教本『天聖經』2196ページ）

その真の父母を中心として統一家全体が一つとなり、和合していくことが神様の願いです。その中心軸となる真の父母様の絶対性、唯一性、不変性、永遠性について、真のお父様は次のように語っておられます。

真の父母というのは一組しかいないのです。人類の一組しかない父母であるということです。歴史に初めて登場した、空前絶後の真の父母が顕現した時代が成約時代であるということです。（八大教材・教本『天聖經』2631ページ）

……真の父母の名前は永遠に一人しかありません。二人ではありません。過去も、現在も、未来も、永遠に一人しかありません。

です。仏教も真の父母、儒教も真の父母、イスラームも真の父母、すべての教祖たちが必要とするその基準です。真の父母によつて初めて、こういう重生の基盤を中心として、新しい天国、地上天国、天上天国がそろうのであって、それ以外にはありません。『祝福』一九九四年春季号、63ページ)

すべてに勝利された真の父母様は、以上のように語っておられます。

私たち統一教会はこのみ言に従つて、さらなる一体化を図り、**真の父母様を中心**に、一つにならなければなりません。

文顯進様、郭錠煥氏を中心とするすべてのUCIのメンバーが、真の父母様のもとに帰ってきて、「真の父母」を中心の一つに和合していくことを、私たちは切に願っています。

三、UCIを支持する人物による「教理研究院の『分派による御言葉改竄の問題(1)』に対する反論(1)」への応答

教理研究院は、「真の父母様宣布文サイト」に「分派による『真のお母様』をおとしめるための御言葉改竄の問題(1) 名言の前後の文章を隠し、意味を誤読させる」を掲載しました。それに対抗して、UCIを支持する人物は、「教理研究院の『分派による御言葉改竄の問題(1)』に対する反論(1)」として文書を公開しました。その欺瞞性を指摘します。

【誤り①】お父様が「お母様は三十八度線の向こう側にいる」と語っている、と解釈

(1) お母様は、三十八度線(国境線)の向こう側にいるとする恣意的解釈

まず、UCIを支持する人物による反論に利用された、彼らによる名言の翻訳文を抜粋します。

「私」が神様の代身として純潔、純血、純愛の表象となつて鏡とならねばならないのに、(皆さんは)そのような鏡になっていますか? ……先生の話を自分に便利に考えます。それが真の父母に侍る人ですか? いつか、足場なら足場になつて総生畜献納の祭物を出せと言つたのに責任者がそれを宣伝する人がどこにいますか? 先生がそのように生きましたか? 言ってみると言うのです! 私たちのお母様にも話してみなさい、いいかげんに生きていますか。

お母様も三十八度線を越えねばならないのです。「あなたはあなたの行くべき道があり、私は私の行く道がある」といつて行ってみなさい、分れました(分裂しました)。一パーセント、〇・何パーセントの差が開いても分かれるのです。天国の門に共に入っていかねばなりません。墮落するとき、(アダムとエバは)一緒に墮落しました。一緒に追い出されたのです。地獄の底まで一緒に行つたのです。(二〇〇九年二月二十八日、名言選集608巻302〜303ページのみ言)

まず、上記のうち、誤りを指摘する部分を引用します。

「先生がそのように生きましたか? 言ってみると言うのです! 私たちのお母様にも話してみなさい、いいかげんに生きているか。お母様も三十八度線を越えねばならないのです。」

この名言に対し、教理研究院では、「私たちのお母様につい

でも話してみなさい、いいかげんに生きているか」と尋ねておられ……これは、お母様はいい加減には生きていない」ということを語っておられるものであ(る)」と述べました。

それに対して、UCIを支持する人物は、次のように反論しています。

「先生がそのように生きましたか？」と聴衆に聞かれ、「言ってみるというのです」と答えを迫っています。そして「私たちのお母様にも話してみなさい。(お父様が)いいかげんに生きているか」。もしここでお母様はいいかげんに生きているか」という意味で語られたというのなら何故直後にお母様が三十八度線の向こう側にいるという意味のことをお父様は語られたのか。

(お父様が)いいかげんに生きているのかと聞いていたお父様が、今度はお母様について語りだされたのはここからである。三十八度線とは本来一つであったはずの韓国を北と南に隔てた国境線である。「お母様が三十八度線を越えねばならない」とおっしゃったということは、お母様は今、三十八度線(国境線)を越えていないという意味である。(注、(一)内の言葉は、教理研究院の補足)

しかし、この解釈は恣意的であり、しかも誤りです。この人物は、「お母様も三十八度線を越えねばならないのです」とのみ言を歪曲しており、論理展開も誤っています。

すなわち、真のお父様が、真のお母様について「お母様も三十八度線を越えねばならないのです」と語られたことを根拠に、お母様は今、「三十八度線を越えていない」という意味である」とし、それは、お母様は三十八度線(国境線)の向こう側に、いる」という意味だと述べ、お父様が語ってもおられない内容をもつ

てお母様をおとしめようとしているのです。

つまり、三十八度線を越えておられるお父様はいいかげんに生きていないが、三十八度線を越えられていないお母様はいいかげんに生きているのだ」という意味に曲解し、教理研究院の「これは、お母様はいい加減には生きていない」ということを語っておられるものであ(る)」という見解を否定しようとしているのです。

このように、み言を恣意的に解釈し、彼らが思い描く、韓鶴子の不従順な姿を描写させようとしているのです。

(2) このみ言が語られた頃の摂理的な背景

このみ言が語られたのは、二〇〇九年二月二十八日であり、これは同年一月十五日(韓国)、一月三十一日(韓国、米国)に、三度にわたって「万王の王神様解放権戴冠式」が挙行された翌月のことです。

この「万王の王神様解放権戴冠式」で、真のお父様は次のようにみ言を語られました。

神様は、万宇宙を創造された後、この上なく待ち焦がれ、願ってこられた日が、まさにこの日です。……真の愛を中心として、ご自身の代身者であり相続者である現象世界の真の父母を求めてこられました。

きょう、私たち夫婦が、畏れ多くも天から印を受け、神様の、実体として立ち、万王の王戴冠式を執り行うこととなり……ご自身の実体として役事する地上の真の父母を通して天法を立て、万王の王の権限をもって、この地球星を復帰する真の愛の革命を促進化するので。……真の父母様が立てた祝福結婚の伝

統を受け継いでいけば、この世界は自動的に一つの家族になるのです。『ファミリー』二〇〇九年三月号、4～6ページ)

この戴冠式で、真のお父様は、「私たち夫婦が……神様の実体として立ち、万王の王戴冠式を……」と宣言しておられます。お父様だけが、神様の解放のために闘われ、神様の実体として立っておられるのではなく、「真の父母」として、夫婦で、神様の実体」として立っておられることを知らなければなりません。

教理研究院は、「この（二月二十八日の）み言のしばらく後で、お父様は『うちの家で何代の孫の中で、お母様の代身として育ち得る孫娘がいつ生まれるか？』それが私の心配なのです。七代を経ても難しいだろうと考えるのです」と語られ、お母様を証しておられます。すなわち、お母様ほどの女性は何代経っても現れないくらい、お母様はすばらしいかただと証しておられるのですと述べていました。しかし、UCIを支持する人物は反論文でこの部分のみ言を最後に掲載しながらも、そのことについては一言も触れようとしません。この部分は、真のお父様が語っておられるみ言の真意を、文脈から理解するために重要な部分です。もし、真のお母様が、いいかげんに生きておられるとするなら、あるいはお父様が、分裂しておられるなら、お父様がこのようにお母様を証しされることはありえません。

真のお父様が、真のお母様は、いいかげんに生きていますと考えておられるなら、「万王の王神様解放権戴冠式」で、「私たち夫婦が……神様の実体として立ち」と宣言されることはありえないはずです。また、二〇〇九年二月二十八日のみ言で、お母様を素晴らしいかたであると証しすることもありえないことです。

さらに、このみ言を語られた約四十日後の四月八日にもお母様を証しておられます。

「統一教会の女性たちの中に、真のお母様の代身となり世界的な使命を果たしうる者が何パーセントいるでしょうか？それが問題です。……統一教会の真の父母は、宇宙的な観において現人神です」(『ファミリー』二〇〇九年六月号、16～17ページ)

このように、再び真のお母様を証しされ、真の父母は「現人神です」とまで語っておられるのです。

さらに、翌月の五月一日に挙行された「真の平和真の父母UN安着大会」でも、お父様は、次のように語っておられます。

きょう私たちは、真に特別で摂理的な一日を迎えました。万王の王であられる真の父母様の金婚式を記念することはもちろん、世界基督教統一神霊協会が創立五十五周年を迎える意義深い日です。……私たちは、去る一月十五日と三十一日、三回にわたって歴史的な万王の王神様解放権戴冠式を挙行しました。……今年の四月は、私たち夫婦が聖婚式を行ってから五十回目となる月（金婚式）です。……私たち夫婦は、聖婚式を通して天から印を受け、人類の真の父母、真の師、真の王の陰しい復帰摂理路程を出発しました。それから五十年、神様を完全解放・釈放してさしあげ、万王の王として迎えするまで、私たち夫婦が歩んできた蕩滅復帰摂理の路程を、どうして筆舌ですべて説明することができるでしょうか？ 遠い将来、歴史家たちが証明し、記録することでしょう。（『ファミリー』二〇〇九年七月号、6～8ページ）

ここで、「私たち夫婦は……天から印を受け……神様を完全解放・釈放してさしあげ」とあるように、真のお父様は、「万王

の王神様解放権戴冠式」「金婚式」および「真の平和 真の父母 UN 安着大会」の一連の式典が、とてつもなく大きな歴史的勝利であったことを語っておられます。しかも、その事實は、「歴史家たちが証明し、記録することでしょう」とまで語っておられるのです。

この歴史的勝利を語られるとき、真のお父様は、常に「私たち夫婦は」と強調して語っておられることで分かるように、お父様お一人だけでなく、真のお母様がそこに含まれています。お母様の生涯も「歴史家たちが証明し、記録する」と言われているのです。お母様がお父様と一体となって歩んでおられたがゆえに、お父様は、お母様と共に、歴史的勝利を宣布してこられたということを知らなければなりません。

ちなみに、真のお父様は二〇〇九年四月十一日に、「ラスベガスで今や九七パーセントまで越え、三パーセント残った峠を越えることができます」と語っておられます。

二月二十八日に語られた「お母様も三十八度線を越えねばならないのです」というみ言は、この「三パーセント残った峠を越えることができます」というみ言との関連で理解しなければならぬものと言えるでしょう。そして、翌年二〇一〇年天暦五月八日（陽暦六月十九日）と天暦五月十五日（陽暦六月二十六日）に、真のお父様は「最終一体」を宣布しておられるのです。

【誤り②】翻訳の文法的解説の誤り

UCIを支持する櫻井正実氏が、教理研究院の「翻訳の誤り」を指摘した部分のみ言を見てみましょう。

前出の「あなたはあなたの行くべき道があり、私は私の行く道がある」といつて行ってみなさい、分かれしました（分裂しました）の部分ですが、櫻井正実氏による翻訳の解説を引用します。

당신은당신 가야 할 길이 있고 나는 나대로 갈 길이 있다고 해서 가보라고요, 갈라졌지, 갈라졌지というのは過去形で、「分かれた。」もしくは「分かれたでしょう。」としか訳すことはできない。Yさんの引用した「分裂しました」も意味は似ているが、「分かれた」が原文通りの表現である。問題は、「私は私の行く道がある」といつて行ってみなさい」は、まだ起こっていないことであるにも関わらず、「分かれてしまったことでしょう」と過去形の仮定形に訳すのは誤訳である。仮定の意味なら「分かれてしまうでしょう」とならなければならないが原文は明らかに過去形である。

しかし、この「分かれしました」「分裂しました」は、適訳ではありません。

櫻井正実氏は、『私は私の行く道がある』といつて行ってみなさい』は、まだ起こっていないことであるにも関わらず、「分かれてしまったことでしょう」と過去形の仮定形に訳すのは誤訳である。仮定の意味なら「分かれてしまうでしょう」とならなければならないが原文は明らかに過去形である。と説明しています。

しかし、そのすぐ前の文章を読むと、「私は私の行く道がある」といつて行ってみなさいは過去形で表現されていません。行ってみなさいと命令形で語られているのです。

一般的に、命令形とは、現在やっていない行動に対して、してみなさいと言いつけるものです。行ってみなさいと命令形で語られたということは、現在、行っていない行動に対して、してみなさいと言いつけていると理解できます。それゆえ、『私は私の行く道がある』といつて行ってみなさい』は、まだ起こっ

ていないことなのです。

したがって、この人物が訳す 分れました 「分裂しました」は、適訳ではないことが分かります。真のお父様の「分かれた」の単語は文法的には過去形で語られています。前後の文脈などを考慮してみると、「分かれてしまったことでしょう」「分かれてしまうでしょう」「分かれていたでしょう」がより適訳であると言えるのです。

すなわち、「갈라졌지」という言葉は、過去形にはなっていますが、**文脈からして、仮定過去**であると読み取れるものです。「あなたはあなたの……行く道がある」と言って、(自分なりに)行ってしまったら、「分かれていた」という意味で語っておられるのです。

ですから、み言を素直に読み進めれば、「分かれていない」「分裂していない」というのが真のお父様の真意であることは明白です。櫻井正実氏は、お父様のみ言をもつてして、家庭連合がお父様と一つになっておらず、お父様と真のお母様が一体となっていないなどと、自分たちの主張を裏づけようと必死ですが、**誤訳**でみ言を全く逆に解釈するようなことはあつてはなりません。

また、文末の「くでしょう」は、推定ではなく、念を押すようなニュアンスの言葉です。

以上、UCIを支持する櫻井正実氏の「翻訳の誤り」の指摘によつて、彼が、いかにみ言を歪曲して解釈し、偽りの論理をもつて多くの人を誤導しようと、巧みにみ言を操作しようとしているのが分かります。

どうしてこのような無理なみ言解釈をしてまで、真のお母様をおとしめようとするのでしょうか？ その目的は、真のお母様の「お父様に対する不従順」によつて、UCIの人物たちが

真のお父様のもとを追い出されてしまったという、彼らの作った「ストーリー」を、食口たちに信じ込ませようとするためだと言えるでしょう。

二〇〇九年一月から五月の一連のみ言で分かるように、真のお父様と真のお母様は一体となつてみ言を共に歩んでこられたのであつて、このようなUCIを支持する人物たちの情報操作にだまされてはなりません。

四、UCIを支持する人物による「アベル女性UN創設大会のみ言—教理研究院の『分派による御言葉改竄の問題(1)』に対する反論(2)」への応答

UCIを支持する人物は、「お父様は、聖とされる五〇日ほど前に、お母様が自分勝手にやって、真の母が不在であると語られた。『オモニを私が育ててきたよ。オモニはいません。文総裁の妻の位置もいません。自分勝手にやっている!! 自分勝手に。ん。』(アベル女性UN創設大会二〇一二年七月十六日)」と述べて、真のお母様をお父様が批判しているとしています。これに対し、私たちは、このみ言は、お父様がお母様を否定しておられるみ言ではないと応答しました。

このアベル女性UN創設大会のみ言を用いた「お母様批判」は、かつてサンクチュアリ教会を支持する人物も拡散しており、それに対する反論は『世界家庭』二〇一六年十月号にすでに掲載しました。UCIを支持する櫻井正実氏も、真のお母様をおとしめようとアベル女性UN創設大会のみ言を「お母様批判」に使い悪用しています。

【誤り①】真のお母様についてではないみ言を、「お母様に言及した」と述べる

UCIを支持する櫻井正実氏は、アベル女性UN創設大会で、真のお父様が講演文の「前置きである」として語られた部分を、次のように真のお母様批判に利用します。（櫻井正実氏が赤で記載した部分には線を引いて表記しています）

二〇一二年七月十六日、清心平和ワールドセンターで開催されたアベル女性UN創設大会は、お父様の最後の大衆演説の場となった。……（略）……

私はアベル女性UN創設大会のフル動画……をネットで探し出し、お父様のスピーチの部分は全て聞いてみた。そのなかで母（オモニ）がいないとはっきりと言及されていた部分だけを紹介する。

黒は講演文をお父様が読み上げられた部分。青は原稿から目を離し、その場で語られたお父様のみ言である。特に母（オモニ）について言及される部分は赤で記した。文脈で推し量れない難解な文章なので、自信がないものは敢えて（～）を入れ空欄にした。意訳もせず、ほぼ直訳しながら誤訳がないよう出来る限り努めた。

本格的に講演文を読まれる前に、お父様は二度「母（オモニ）がいない」と言及され、講演の最後の方でも一度、その時は、はっきりと「文総裁の妻の位置ありません」と語られている。……（略）……

（講演文を読まれている）A編の天地人真の父母定着実体ミ言宣布天宙大会も、B編はアベル女性連合創設大会の基調演説（講演文を読むのを中断）、アベル女性、母（オモニ）がい

ません。神様、父（アボジ）を知っているが父（アボジ）の母（オモニ）のいない父（アボジ）を自分の神様だと戦って奪われたり（～）戦うこの教団たちの（～）と国の権威の喪失はだれが是正をしてくれるのか！ あ？ 私の名前は龍明。（～）姓もあります。龍明。十七歳二月にイエスが生まれておい！ 龍明お兄様。思いがけないイエスという者が、ハンサムなイエスが表れて……（略）……

そのような意味でみ言を始めましょう。B編がアベル女性、アベル女性、アベル、アベル女性UN創設大会。アベル女性UN創設大会に表れる母（オモニ）がいません。母（オモニ）が失ってしまったら誰故に、アダムが責任を果たせなくて母（オモニ）失ってしまった。（2度うなずかれる）アベル女性UN創設大会基調演説よく聞いてみなさい。先生の一生のあの肉声は母（オモニ）自体が父（アボジ）を追い払ってしまったて天地を追い払ってしまった（～）家から訪ねて来て侍ることが出来る教育を私が準備したために母（オモニ）を再創造して、いくら反対して、いくらしても母（オモニ）を満天下に神様の夜の神様、昼の神様一つになったら創造主の母（オモニ）の位置に立てて見せると鉄石のような天宙の谷……（略）……

櫻井正実氏は、上述部分で「お父様は二度『母（オモニ）がいない』と言及され（た）」として真のお母様批判をしています。この部分を正しく理解するために櫻井正実氏がディクテーションしていない、真のお父様の講演文の「前提」となる説明を紹介したうえで、これについて応答します。

【真のお父様の講演】（注、太字の部分は講演文、それ以外はアドリブで語られた部分）

大会の前に、私の話を約三十分間、前提として話してから、結果としての話を始めます。……（略）……

今に至るまで、数多くの宗教がありますが、父なる神様を信じる宗教にはなりましたが、母のいない宗教を信じてきたという恥ずべき、恥ずかしさをこの時間に爆発させ、その歴史的な、あつてはならないその悲運の痕跡を取り消すために、ここに現れた……私の歩む道は、平和な道ではありませんでした。

………

A編の天地人真の父母定着実体宣言宣布宇宙大会も、B編のアベル女性連合創設大会基調演説。アベル女性、女性。母がいまません。父なる神様は知っていますが、母のいない父を自分の神様だと言って争い、奪い合う闘いをするこの教団どもの愚かさ。と国の権威の喪失を、誰が是正してあげるのですか。

私の名前は龍明でした。姓もありません。龍明が十七歳の二月にイエスが現れて、「やあ、龍明兄さん」と。いきなりイエスという者が、ハンサムなイエスが現れて、……（略）……

さあ、そのような意味において、話を始めましょう。B編がアベル女性UN創設大会です。アベル女性UN創設大会に現れる母がいまません。母を失ったのは誰のせいですか。アダムが責任を果たせずに、母を失いました。

アベル女性UN創設大会の基調演説、よく聞きなさい。先生の一生の重要性は、母自身が父を追い払い、天地を追い払い、逃げてきた家から訪ねてきて、侍ることのできる教育を私が準備したので、母を再創造して、いくら反対したとしても、母を満天下に、神様の……。夜の神様、昼の神様、一つになって、創造主の母の位置に立ててみせようという、鉄石のように固い……定州の谷間、……（略）……

以上が、真のお父様が講演文全体の「前提」として語られたみ言であり、そして櫻井正実氏が採り上げた部分です。

この冒頭の部分で、真のお父様は、今まで宗教が「母のいない神様」を信じてきたことに対し、それを是正しなければならぬと訴えられました。この「前提」を踏まえるなら、「母がいまません」というみ言は神観の問題を指摘しておられることを知らなければなりません。以下は、櫻井正実氏が「母（オモ二）がいまない」と言及されたみ言として取り上げた部分の正確な訳です。

「アベル女性、女性。母がいまません。父なる神様は知っていますが、母のいない父を自分の神様だと言って争い、奪い合う闘いをするこの教団どもの愚かさ。と国の権威の喪失を、誰が是正してあげるのですか」

ここで真のお父様が語っておられる「母がいまません」は、文脈から見ると明らかに神観の問題について語っておられます。その直後、「母のいない父を自分の神様だと言って争い、奪い合う闘いをするこの教団どもの愚かさ」と語っておられることと分かるように、その意味を正しく理解するために補足を入れれば、「母（なる神様）がいまません」ということになります。そのような意味で述べておられるみ言を、櫻井正実氏は「お父様は二度『母（オモ二）がいまない』と言及された」とし、いかにもお父様が真のお母様を否定しておられるかのように述べています。さらに櫻井正実氏は、二度目に真のお父様が「母（オモ二）がいまない」と言及されたとして次の部分を採り上げます。

「B編がアベル女性UN創設大会です。アベル女性UN創設大会に現れる母がいまません。母を失ったのは誰のせいですか。アダムが責任を果たせずに、母を失いました」

しかし、これも真のお父様が、真のお母様を否定しておられるみ言ではありません。この「アベル女性UN創設大会」の講演文の冒頭で、お父様は聴衆に対し「私の妻である韓鶴子総裁と共に、心から歓迎いたします」と繰り返し述べられ、「韓鶴子総裁と共に」「私たち夫婦」「真の父母」という表現を繰り返して語っておられることを考察すれば、このみ言が「真の母の不在」について語っておられるものでないのは明白です。このみ言も、その後の文脈を踏まえて理解すべきものです。

真のお父様は、「B編がアベル女性UN創設大会です。アベル女性UN創設大会に現れる母がいません。母を失ったのは誰のせいですか。アダムが責任を果たせずに、母を失いました」に続く部分で、「先生の一生の重要性は、母自体が父を追い払い、天地を追い払い、逃げてきた家から訪ねてきて、待てることのできる教育を私が準備したので、母を再創造して、いくら反対したとしても、母を満天下に、神様の……。夜の神様、昼の神様、一つになって、創造主の母の位置に立ててみせよう」と述べておられ、文脈から見れば、これも神観の問題と密接に関連して語っておられるのが分かります。

真のお父様は、「母がいません」と語られた直後、「母を失ったのは誰のせいですか」と述べ、アダムに言及して「母を失いました」と述べておられます。ここで言う「母」は、文脈から見るとエバを指します。本来、神様の実体となるべきアダムとエバが墮落したため、今日までの歴史で、母なる神様が現れてくることができなかったと言われているのです。

それゆえ、母なる神様が現れてくることができなかったという観点から、前述した内容と同じく、これを補足して述べる」と「アベル女性UN創設大会に現れる母（なる神様）がいません」という趣旨で述べておられるものです。だからこそ、真のお父

様は「母を再創造して、いくら反対したとしても、母を満天下に、神様の……。夜の神様、昼の神様、一つになって、創造主の母の位置に立ててみせよう」と鉄石のように固い意志をもって今まで歩んできたと言っておられるのです。

【誤り②】「お母様（オモニム）」を「母（オモニ）」と訳し真のお父様が真のお母様を批判したと述べる

櫻井正実氏はアベル女性UN創設大会で、真のお父様が、真のお母様に対し「母（オモニ）」を私が育ててきました。母（オモニ）いません。文総裁の妻の位置もありません。自分勝手だ！自分勝手」と非難したとして次のように書いています。

（講演文を読まれる）女性連合は創設当時から私と韓鶴子総裁が共同創始者として活動し世界の各大陸と国々の組織化活動の基盤をつくりながら、かつて世界一六〇カ国に派遣された一六〇〇名の日本の女性連合のボランティア会員を始めたとした全世界の会員を中心に平和運動を展開してきました。私達夫婦が二十年前の本連合創設時、闡明したメッセージ、メッセージの（へ）にしたがって勝利した世界的な女性代表、真のお母様に侍り、（講演文を読むのを中断され）母（オモニ）を私が育ててきました。母（オモニ）いません。文総裁の妻の位置もありません。自分勝手だ！自分勝手。（また講演文を読み始める）

世界女性代表、真のお母様に侍り真なる母の像、真なる妻の像を成立して真の愛の運動を理想的な家庭を結実させなければならず……（略）……

—引用終了

母（オモニ）がいないと三度も言及された。特に三回目は、「母（オモニ）を私が育ててきました。母（オモニ） いません。文総裁の妻の位置ありません。自分勝手だ！ 自分勝手」と語られている。このオモニはお母様ではなく、聴衆だともいうのであろうか。講演文の内容はお母様を証す内容となっているが、正にその講演文の中間で、お父様は「文総裁の妻の位置がない」と講演文の内容とは違うことを語られていたのである。

櫻井正実氏は以上のように記して、真のお母様をおとしめています。櫻井正実氏が採り上げた部分を忠実にデイクテーションし翻訳すれば、以下ようになります。（注、太字は講演文、それ以外はアドリブの部分）

女性連合は、創設当時から私と韓鶴子総裁が共同創始者として活動し、世界の各大陸と国々の組織および活動基盤を築き上げ、早くから世界一六〇カ国に派遣された日本女性連合のボランティア会員千六百人をはじめとする全世界の会員を中心として、平和運動を展開してきました。私たち夫婦が二十年前、女性連合の創設時に明らかにしたメッセージの精神に従い、勝利した世界的な女性代表である真のお母様（チャムオモニム）に侍り、お母様（オモニム）を私が育ててきました。母（オモニ）がいません。文総裁の妻の位置ありません。自分かつて、自分かつてです。世界的な女性代表である真のお母様に侍り、真なる母の像、真なる妻の像を確立し、真の愛の運動によって理想的な家庭を結実させなければならず……（略）……

まず、着目すべき部分が「勝利した世界的な女性代表である

真のお母様に侍り」という部分です。真のお父様は、もともと講演文で「勝利した世界的な女性代表である真の母に侍り」と「真の母（チャムオモニ）」となっていたにもかかわらず、それを、あえて「勝利した世界的な女性代表である真のお母様（チャムオモニム）に侍り」と言い換えて語っておられます。この「真のお母様」という部分は、韓鶴子女史を明確に意識された表現であり、その韓鶴子女史を「勝利した世界的な女性代表」と紹介しておられるのです。

つまり、真のお父様は、私たちに對し、そのような「勝利した世界的な女性代表である」韓鶴子女史に「侍り」なさいと言っておられるのです。

続いて、注目すべき部分が「固有名詞」と「一般名詞」の使い分けです。真のお父様は、それに続くアドリブ部分である最初の「お母様」という言葉を、固有名詞で「お母様（オモニム）」と語っておられます。

したがって、そのような「勝利した世界的な女性代表である真のお母様（韓鶴子女史）」を「私（真のお父様）が育ててきました」と語っておられます。これは、真のお父様が、勝利された真のお母様を誇りに思っておられ、そういう人類の真のお母様を育ててこれたと自負しておられる表現と言えます。

ところが、その部分に続く「母がいません」では、それまでと違って「一般名詞」で「母（オモニ）」と語っておられます。

これは、今までの歴史において勝利した母がいなかった（しかし、韓鶴子女史が初めて勝利した母として立った）ということであり、韓鶴子女史を指して語っておられるではありません。

櫻井正実氏は、そのような明白な違いがあることを無視し、いずれの言葉も「オモニ」とカタカナで記述することで、いかにも韓鶴子女史について語っているかのようにしています。

また、講演文全体の趣旨から見ると、真のお父様が冒頭の「前提部分」で「今に至るまで、数多くの宗教がありますが、父なる神様を信じる宗教にはなりませんが、母のいない宗教を信じてきたという恥ずべき、恥ずかしさをこの時間に爆発させ」と語っておられることから、今に至るまで「母なる神様」がいなかったことに思いをはせ、「母がいまません」と、その思いを爆発させておられるのです。

もし、この部分の「母がいまません」が、韓鶴子女史であると仮定するなら、その直前で「勝利した世界的な女性代表である真のお母様に侍り」なさいと言っておられるにもかかわらず、その侍るべき「母」がいけないという話になってしまったため、話が矛盾したものとなります。これでは、存在しない「母」に対して「侍りなさい」と命じる、全く意味不明な論述となります。

それに続く、「文総裁の妻の位置ありません」は、そういう勝利した「真のお母様」がもともと与えられるわけではないという意味で語っておられます。つまり、独り娘（独生女）としてお生まれになった韓鶴子女史にも、「文総裁の妻」、「真の母」として勝利するまでの過程があり、果たすべき責任分担があったという意味で語っておられるのです。

また、それと同時に、今までの宗教において「父なる神様」は信奉してきたが、その妻の位置である「母なる神様」を信奉してこなかったことに対し、それを指摘して語っておられるとも言えるみ言です。

そして、「自分かつて、自分かつてです」と叱責しておられるのは、女性一般に対し、さらには、父のいない神様を信奉してきた人類に対して「自分かつて、自分かつてです」と語っておられるのです。

事実、真のお父様が語っておられる映像を見ると、このとき

に、会場の聴衆に向かって、語気を強くして語っておられることから、そのことが分かります。だからこそ、お父様は、聴衆に向かって再度、勝利された「世界的な女性代表である真のお母様に侍り」と繰り返し語られたうえで、その真のお母様に侍ることによって、「真なる母の像、真なる妻の像を確立し、真の愛の運動によって理想的な家庭を結実させなければ」ならないと言っておられるのです。

したがって、櫻井正実氏は、講演文全体の流れと、お父様の真意を無視し、それを曲解した、とんでもないシチュエーション（状況）をつくり上げています。お父様ご自身をおとしめていると言っても過言ではありません。

事実、その映像で、その前後の部分を確認してみると、真のお父様が「自分かつて、自分かつてです」と厳しい口調で叱責しておられるときに、真のお母様はお父様のすぐ近くに座っておられるのです。

にもかかわらず、真のお父様が真のお母様を見るそぶりは一切なく、会場を見渡すように聴衆に向かって「自分かつて、自分かつてです」と語っておられます。これを見ても、この言葉が、お母様に対して語っておられるものでないのは明らかです。

また、講演文全体を通して見ると、この叱責の言葉は真のお母様に対してではないことが、より明白になります。なぜなら、お母様を叱責される意味に受け取れる表現が講演文に全くないからです。

むしろ前述したように、講演文の冒頭で、真のお父様は聴衆に対し「私の妻である韓鶴子総裁と共に、心から歓迎いたします」と繰り返し語っておられ、また、「韓鶴子総裁と共に」、「私たち夫婦」、「真の父母」という表現を繰り返し語っておられることから考察すると、真のお父様は、勝利された「真の母」である

韓鶴子女史と共に、勝利された「真の父母」としてこの講演をしておられるのは疑いようのないことです。

ところが、金鍾奭著『統一教会の分裂』（日本語訳）は、「アベル女性UN創設大会で、創始者（注、お父様）が基調講演をした。基調講演文を読んでいる途中、突然、創始者は韓鶴子に向かつて怒りを露わにしながら、お母さんを私が育ててきた。お母さんがいません。文総裁の妻の位置もないのです。自分勝手にしています。自分勝手に！」と韓鶴子に向かつて、立腹され原稿を読み上げた」（252ページ）などと事実に対することを平然と述べています。

私たちは、講演全体の趣旨や文脈を無視したUCIを支持する人物たちの悪意に満ちた言説に惑わされてはなりません。

五、UCIを支持する人々が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴く（一）

——「天一国のない基元節を出発」は、み言隠蔽に基づく悪意ある解釈

真のお父様はその生涯路程において、真の父母としての使命成就を勝利的に積み重ねられ、二〇一〇年に真のお母様との「最終一体」を宣言されました。二〇一二年四月には「天地人真の父母定着」を宣布され、さらに「天地人真の父母定着完了」を成就されました。

そして、私たちは二〇一三年天曆一月十三日、歴史的な「基元節」を迎え、実体的天一国の出発をすることができました。

ところが、UCIを支持する人々が二〇一六年の秋頃から日本で集会を行って広めている金鍾奭著『統一教会の分裂』の日

本語訳本は、「天一国のない基元節を出発した」と主張しています。その内容は、真の父母様の「最終一体」と「天地人真の父母定着」という歴史的勝利を否定し、読む者をして、真のお父様と真のお母様の関係を疑うようにしむけさせ、お母様をおとしめています。

（一）「最終一体」宣言後の真のお父様の認識は、「天地人真の父母定着完了」

真のお父様は二〇一〇年六月十九日（天曆五月八日）と同年六月二十六日（天曆五月十五日）、米国・ラスベガスで真のお母様との「最終一体」を宣言されました。

真の父母様はこの「最終一体」の宣言から十二日後の同年七月八日、韓国・天正宮博物館で「天地人真の父母定着実体み言宣布大会」を開催されました。

そして、翌年五月二十六日には、韓国・仁川で「天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会」を開催され、「皆様、今日、私たちが生きているこの時代は、歴史的な大天宙的革命期です。歴史を変え、霊界と地上界を一つにして、神様が太初から願ってこられた理想天国をこの地上に創建しなければならぬ大天宙的革命期です。これ以上、延期したり、延長する時間はありません。天は既に、二〇一三年一月十三日を『基元節』として宣布しました。実体的天一国の始発であり、起源となる日が正にその日なのです」（韓日対訳『天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会』39～41ページ）と宣布しておられます。

さらに真のお父様は世界巡回をされ、天宙大会を各地で開催していかれ、二〇一二年の「真の神の日」（天曆一月一日（陽曆一月二十三日））の年頭標語は「天地人真の父母勝利解放完

成時代」と発表されました。

その後、真のお父様は、同年三月に真のお母様を日本に遣わされ、「天地人真の父母様勝利解放完成時代宣布大会」を開催され、その大会のようすを巨文島で見守られながら、大会に同参されました。

その勝利圏の上で、第五十三回「真の父母の日」(陽暦三月二十二日)に、真のお父様は「神様と人類の責任が完結される天の国の憲法が何かといえ、『天地人真の父母定着』です。それさえ成れば、全てが終わるのです。……『天地人真の父母定着』、それで全てが終わるのです」(「トゥデイズ・ワールドジャパン」二〇一二年五月号、43ページ)と語っておられました。

その予告どおり、真のお父様は二〇一二年四月十四日、ラスベガスの天和宮で「天地人真の父母定着実体宣言宣布宇宙大会を最終完成・完結することをお父様の前に奉獻します」という「特別宣布式」をされました(同、二〇一二年六月号、19ページ)。そして、その七日後の同年四月二十一日に韓国・清心平和ワールドセンターで、真のお父様は「天地人真の父母様特別集会」を開催され、次のようにみ言を語っておられます。

『天地人真の父母定着完了』が、この本(講演文)の題名です。天地人が真の父母となつて定着する教材・教本だということです。……あなたがたも批評をせず、『この言葉どおりに一度生きてみたい』と考える人が、福を受けて生きることができのです。……創造主の資格をもって、最後に万王の王と父母の先祖の中の先祖となりうる勝利の覇権の栄光の宝座に座する人は、億千万代においてただ一つの夫婦であつて、二つはいません。夫婦が二つですか、一つですか。万国の王たち、偽者たちがなぜこんなに多いのですか。万王の王はお一方です」(KMS

中和新聞」二〇一二年四月二十七日号)

「天地人真の父母定着完了」の講演文をもって挙行されたこの大会で、真のお父様は「栄光の宝座に座する人は、億千万代においてただ一つの夫婦であつて、二つはいません。……万王の王はお一方です」と語られ、天一国の「万王の王」がお一方であることを明らかにされました。しかも、「億千万代においてただ一つの夫婦」と述べられ、それが文鮮明・韓鶴子ご夫妻であられることを明言されました。このように、お父様は「天地人真の父母定着」を発表され、天地人真の父母定着完了を成し遂げておられます。

以上が、真のお父様が真のお母様と共に、二〇一〇年から二〇一二年にかけて「最終一体」の摂理を歩まれながら、全人類に対して公式的に発表しておられる、お父様ご自身の「定着完了」に関する認識です。

ところが、UCIを支持する人々が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』は、このような真のお父様ご自身の認識を無視して、お父様と真のお母様は一体となつておられないという、み言と異なった「虚偽のストーリー」を創作しています。

(2)『統一教会の分裂』に書かれた「秘密文書」に関するみ言隠蔽

①金鍾奭氏の「創始者は韓鶴子と一体になれなかった」という欺瞞

『統一教会の分裂』が述べる「創始者は韓鶴子と一体になれなかった」という主張は、真のお父様のみ言の「隠蔽」に基づく策略的な言説であり、誤りです。まず、『統一教会の分裂』

の問題となる箇所を以下、引用します。

「真のお父様は」二〇一〇年二月十九日、自分の宗教的理想と統一教会の目的、そして絶対者・神様の夢が叶う『天一国』が二〇一三年陰暦一月十三日の『基元節』を期して成されなければならぬと宣言した。また、全統一教会人は基元節に天一国実現の為に責任を果たさなければならぬと強調した。……責任を果たさなければ、二〇一三年陰暦一月十三日は天一国のない基元節になるのである」(『統一教会の分裂』54～55ページ。カッコ)のなかの言葉は教理研究院の補足。以下、同様)

「二〇〇九年七月十二日、創始者(注、真のお父様)が韓鶴子を神様の夫人の位置に立てることはできないと言及する」(同、157ページ。注、この虚偽の主張に対する反論は後述)

「二〇一〇年七月の状況で……創始者はこの日まで韓鶴子と一体になれなかったことを吐露していた。『創始者と一つになる』という言葉の意味は、韓鶴子が創始者の志に絶対服従することを言い、真の家庭の真なる母として、真のお父様の真なる妻として、人類の前に真の父母としての責任と使命を果たすことを言う」(同、178～179ページ)

「創始者は、韓鶴子が(真のお父様)自身と一つになるという約束を根拠に『完全に一体を成した』という宣布をした。秘密文書の約束を守らなければ、創始者のこの宣布は無効になるという意味も含まれている」(同、180ページ)

「創始者が韓鶴子に対する残念な感情……を集中的に表出し

始めた時期は、大体二〇〇〇年度末と考えられる。摂理に対する無知、創始者を不信する韓鶴子の態度などに言及しながら、創始者に絶対服従しなければならぬと教示した。……韓鶴子が完成したという趣旨の言及後にも、創始者が韓鶴子の未成熟と不信を強く叱責しながら、絶対服従することを言及しているのを考える時、私たちが知ることのできない創始者の苦心があつたに間違いない」(同、245～246ページ)

この『統一教会の分裂』のストーリーは、前項で述べた真のお父様ご自身の認識とは異なっており、**真のお母様はお父様と一体になつていない**、というテーマで一貫しています。これは、**虚偽のストーリー**です。

金鍾奭氏は、「真のお母様が完成した」という根拠である「最終一体」をされたというみ言についても、「秘密文書の約束を守らなければ、創始者のこの宣布は無効になるという意味も含まれている」(180ページ)と、勝手に解釈しています。

真のお父様ご自身は、「最終一体」の宣布の後、天和宮で**「最終完成・完結する」**という**「特別宣布式」**をしておられ、さらには**「天地人真の父母定着完了」**を宣言しておられるにもかかわらず、金鍾奭氏は、真のお母様はお父様に絶対服従せず歩まれたと論じており、そのことに対してお父様が「韓鶴子(真のお母様)の未成熟と不信を強く叱責しながら」(254ページ)歩んでおられたのだと、虚偽の主張をしています。

『統一教会の分裂』には**「み言隠蔽」**と、自分に都合よくみ言を解釈することによって人々を惑わそうとする**「悪意」**が込められていると見なければなりません。

②み言隠蔽に基づく、秘密文書に対する悪意の解釈

金鍾奭氏は、前述のように「二〇一〇年七月の状況で……創始者はこの日まで韓鶴子と一体になれなかったことを吐露していた」と述べます。彼は、その根拠として韓国家庭連合の機関誌『統一世界』二〇一〇年六月号の10ページから11ページのみ言を引用しています。（注、以下の訳文は『統一教会の分裂』に掲載されたもの）

「見なさい。天暦二〇一〇年五月十五日（陽暦六月二十五日）、これがナンバー1です。アリア（ホテル）から出発した最後の日に訓示したものです。……その日が重要です。それがお母さんとお父さんが最後に宣言した秘密文書です。これは昼夜の神様も知らないものです。天暦二〇一〇年五月十五日午前三時三十五分とは何なのか。その時の出来事を中心に、その後の方針を密かにお母さんと約束しました。間違いなく、お母さんがお父さんと一体となって歩むと約束した時間です。

それまでは、お母さんがお父さんと一つになって行くという話をしませんでした。神様と世界に公布できませんでした。それを公布した時間が、天暦二〇一〇年五月十五日午前三時三十五分でした。この三時三十五分が重要です。三時は三時代を示し、二十五分は百年を中心として四分の一年を示します。

墮落した世界の終幕前においてお母様がお父様と神様を中心として約束しましたが、それが天暦二〇一〇年五月十五日午前三時二十五分の出来事でした。それが題目になっています。そうして『二十五分は一〇〇の四分の二に該当し、三時は初不得三（精進すれば成功するの意味）の三時代を代表し、旧約・新約・成約時代の完成・完結・完了の時代を迎え、真のお父様と真のお母様の最終一体圏が完成・完了した全体・全般・全権・全能の時代を奉獻することを表す！』としましたが、

ここに全て入るのです。純潔・純血・純愛の完備を見るアリアスカイ（Aria Sky）スタジオで、天暦五月八日（陽暦六月十九日）二十分に発表完結される！と言いました。全てが終わってお母様と完全に霊界に奉獻することのできる祈禱を捧げた時間です。『完結される、アジュ！』となっているので終わったのです」（178～179ページ）

『統一教会の分裂』は、真のお父様が語っておられる「秘密文書」とは、天暦二〇一〇年五月十五日午前三時三十五分に、真のお母様とお父様が宣言をしたものであり、それはお母さんがお父さんと一体となって歩むと約束した時間であると解釈します。

金鍾奭氏の欺瞞は、彼の著書に肝心の「秘密文書」の具体的な内容が記されておらず、その部分を意図的にカットしていることです。金鍾奭氏が引用した韓国機関誌『統一世界』二〇一〇年六月号の続きの部分には、真のお父様が「秘密文書」と言われる具体的内容が記されています。

「三時三十五分にオモニ（お母様）をオモニとして定めます。神様お母様（ハナニムオモニ）、実体のオモニ、真の父母のオモニ、アボジ（お父様）のオモニ、自分の妻、自分のハルモニ（祖母）……。アボジ（お父様）、自分の夫、カインとアベルの息子二人まで八代男性を踏んで越えられる女性の権威を持たなければ、先生に従って天国に入れないという理論的な結論です。ここに、該当する文書が全てあります。文書は守らなければならぬというのです」（『統一世界』二〇一〇年六月号、12ページ）

二〇一〇年天暦五月十五日午前三時三十五分、真のお父様は

真のお母様をお母様として定められ、最終一体を宣布しておられます。この部分が「秘密文書」の核心部分です。

金鍾奭氏は、秘密文書の約束を守らなければ「この宣布は無効になる」という意味も含まれている」（『統一教会の分裂』180ページ）と述べますが、真のお父様はそのような言葉を一切語っておられません。金鍾奭氏は「……八代男性を踏んで越えられる女性の権威を持たなければ、先生に従って天国に入れない」という理論的な結論です。ここに、該当する文書が全てあります。文書は守らなければならないのです。この部分をもって、秘密文書の約束を守らなければ「この宣布は無効になる」という意味も含まれている」と主張しているのかもしれませんが、お父様が語られているのは、真のお母様が先生に従って天国に入るためには「（お母様が）八代男性を踏んで越えられる女性の権威を持たなければ」ならないので、「三時二十五分にオモニ（お母様）をオモニとして定めます」と述べておられるのであり、文書が守られることを「オモニと定める」条件などとはしていません。

そして、真のお父様は、真のお母様をオモニと定められただけでなく、「天地人真の父母定着完了」まで宣布しておられるのです。金鍾奭氏の問題点は、その後、お父様が「定着完了」を宣布しておられることを無視して論じている点です。

私たちは二〇一三年天暦一月十三日、真のお父様が、す、で、に、宣布、しておられたように、神様の夢であった「基元節」を迎えることができ、実体的天一国を出発する日を迎えました。その日には、「天地人真の父母様天一国即位式」「天一国基元節入籍祝福式」が举行され、天一国の出発が宣布され、同時に「基元節入籍祝福式」に参加した祝福家庭は、天一国に入籍したのです。そして、天一国に入籍した祝福家庭には「基元節天一国国民証」が授与された

のです。

③真のお父様が「韓鶴子を神様の夫人の位置に立てることはできない」と語ったとする虚偽

また、金鍾奭氏は、『統一教会の分裂』で「二〇〇九・七・十二 創始者が韓鶴子を神様の夫人の位置に立てることはできないと言及する」（157ページ）と述べています。

彼のこの主張は誤りです。まず、『統一教会の分裂』の訳文を以下、引用します。

「お母さんがどれほど大胆か分かりません。こうした原理原則を中心として天の国の天法生活に入ると一遍に引っぱり得る状況がたくさんあることを知らずに勝手に生きています。そこに引っぱりかからないように私が垣根になってあげて、蘇生時代から国家解放圏までもお母さんを保護する責任を今しています。垣根となることは自分の垣根圏と対等な位置でできるものではありません。先生が作った垣根ができる前にはできません。お母さんがどうして神様の夫人の位置に立ってますか。墮落した女として、どうして真の父母の夫人の位置に立ってますか。真なる僕の夫人の位置にも立てずに追い出されて。それを殺してしまおうとするのですよ。そのような人を掴まえて神様の夫人の位置に立てますか。そんな馬鹿げた行動がどこにありますか」（マルスム選集614-28）

以上の訳文を読むと、このみ言は、真のお母様に対する真のお父様の忠告のように読め、「自分勝手に生きておられるお母様」という意味に読めてしまう翻訳となっています。多くの人は、「そのような人をつかまえて神様の夫人の位置に立てられるの

か？ そんな馬鹿げた行動がどこにあるのか？」と怒っておられるみ言のように読むことでしょう。しかし、事実はそうではありません。実際の文章を、それらの前後を含めて、以下引用します。

神様が協力をせず、霊界が協力をしないので、霊界が協力できる勝利的基盤をつくらなければなりません。神様が協力できる勝利的基盤がどこにありますか？ 自分自身の中にありません。先生をつかんで行かなければなりません。先生も今まで絶対信仰、絶対愛、絶対服従で束ねてきたのであって、別の何もありません。私の言葉がなく、私の主張がありません。

小見出し：垣根を作ってあげ、お母様を保護してあげている

お母様はどれほど大胆なのか分かりません。このような原理原則を中心として天の国の天法生活に入っていくようになるとうすぐに引かかる状況がたくさんあることを知らず、心の行くままに生きています。そこに引つかからないように私が垣根をつくってあげ、蘇生時代から国家解放圏までもお母様を保護してあげる責任を今、しています。垣根になるそれが、自分の垣根圏と同等な位置でなされるのではありません。先生が築いてあげた垣根となる前にはできません。

お母様がどのように神様の夫人の位置に出ますか？ 墮落した女として、どのように真の父母の夫人の位置に出ますか？ 真の僕の夫人の位置もできないで、追いかけて回されてです。それを殺してしまおうとするのということです。そのような人をつかまえて神様の夫人の位置に立てますか？ そのようなことができる馬鹿げた行動がどこにありますか？ 統一教会の皆さんがそうなのです

真のお父様が、真のお母様を「神様の夫人の位置に立てることはできないと言及する」としている『統一教会の分裂』の翻訳文を、教理研究院の翻訳文と比較して検証します。

『統一教会の分裂』の翻訳

「お母さんが」どうして神様の夫人の位置に立てますか」

（教理研究院の翻訳）

「お母様がどのように神様の夫人の位置に出ますか？」

『統一教会の分裂』が「どうして」と訳した原文は、韓国語で「어떻게」と書かれています。これを「Why」の意味で訳します。ゆえに、その後に続く文章が全て、神様の夫人の位置に立てられない理由のみ言として読めてしまいます。しかし、ここでの「어떻게」の正確な意味は「Why」ではなく、「How」であり、「どのように」が正しい訳語です。したがって、このみ言は、「お母様をどのように神様の夫人の位置に」という状況、状態、方法などを尋ねておられるみ言なのです。

また、「立てますか」と訳している原文を見ると、韓国語で「나가가?」と書かれています。この言葉を彼は「立てますか」と訳し、疑問符の「?」も省略しています。この「お母さんが」どうして神様の夫人の位置に立てますか」との訳文を読めば、まるで、真のお母様の不従順な姿に真のお父様が苦心しておられ、神様の夫人の位置を否定して語っておられる深刻なみ言であるかのように読めます。

しかし、韓国語の「나가가?」は、「나가가다（動詞）+나?（疑問）」の形です。「나가가다」は動詞であり、一般的に「出る」という意味です。したがって、「立てる」は誤訳です。

そして、「나?」は疑問形ですが、これは、少し驚いている

ときに使われる表現です。それゆえ、「ナガナ？」は「出ますか？」とするのが適訳なのです。

この「お母様がどのように神様の夫人の位置に出ますか？」は、その前で語られた状況を踏まえたとえで、真のお父様が「お母様が（そのような状況で）どのように神様の夫人の位置に出ますか？」と尋ねておられる内容なのです。

ところが、『統一教会の分裂』日本語版は疑問符「？」を省略し、さらに「立てますか」と誤訳しています。しかも、『統一教会の分裂』は、最も重要な部分をカットしています。それが、最後に訳した「統一教会の皆さんがそうなのです」の部分です。

この一文が入ることで、真のお父様が指摘しておられる「馬鹿げた行動」の人物とは、真のお母様ではなく「統一教会の皆さん」であることがはっきりします。

以上の内容から、『統一教会の分裂』の「創始者が韓鶴子を神様の夫人の位置に立てることはできないと言及する」という主張は完全な誤りであることが明白となります。結局、このみ言は、真のお父様が、真のお母様以外の統一教会の女性たちに対して、「皆さんを神様の夫人の位置に立てることはできない」、「お母様しか神様の夫人の位置に立てられない」と言及しておられるみ言だったのです。

この肝心な部分の「み言隠蔽」と「誤訳」は、金鍾奭氏および翻訳者が真実を伝えるために「事実」に基づいて書物を世に出そうとするのではなく、何としてでも、真のお母様をおとしめようとする目的と動機をもって、『統一教会の分裂』を策略的に著し、出版していることを裏付けます。

私たちは、真のお母様をおとしめようとする不純な動機からなされる、彼らのみ言の悪用にだまされてはなりません。

六、UCIを支持する人々が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴く(二)

——金鍾奭氏が主張する「アイデンティティ」の誤り・その一

(1) 真の父母の存在しない「One Family Under God」神様の下の「大家族」の主張について

金鍾奭氏が『統一教会の分裂』で述べている「統一教会の核心アイデンティティ」の部分以下、引用します。

統一教会の核心アイデンティティは『One Family Under God』、神様の下の「大家族」という標語に集約される。この標語は……『神様を父母として侍る一つの血縁関係の大家族世界を志向する』という意味である。……文顯進は、統一教会の核心アイデンティティに対する見解を表明することによって、統一教会の伝統に対する自分のアイデンティティを明らかにした。第一に彼は、復帰摂理の中心が創始者ではなく、創造主である神様であることを主張する。彼の認識は、復帰された人間と創造主である神様との関係を明らかにすることによって、創始者と韓鶴子を神格化しようとする既存の統一教会神学を批判する」(62～63ページ。注、太字と圏点は教理研究院による)

以上のように、『統一教会の分裂』は、統一教会の核心アイデンティティを「One Family Under God」神様の下の「大家族」であると規定します。そして、その「大家族世界とは「神様を父母として侍る一つの血縁関係の大家族世界を志向する」とことと意味づけをします。

この意味づけは正しいのでしょうか。以下、『原理講論』お

よびみ言を引用します。

天国においては、神の命令が人類の真の父母を通して、すべての子女たちに伝達されることにより、みな一つの目的に向かつて動じ静ずるようになるのである。(69ページ)

個性完成して、罪を犯すことができなくなったアダムとエバが、神の祝福なされたみ言どおり、善の子女を繁殖して、罪のない家庭と社会をつくったならば、これがすなわち、一つの父母を中心とした大家族をもって建設されるところの天国であつたはずである。(135ページ)

再臨の主を父母として頂く、一つの大家族による理想世界(603～604ページ)

天運は、世界が一つの垣根となり、人類が一つの地球家族になることを求めています。……全人類は、唯一なる真の父母のもと、同じ兄弟であるという自覚をもつとき、答えが出てきます。神様と真の父母のもと、人類が一つの大家族を築き、互いにために生きて和合するとき、すべての問題が解けます。(『真の父母經』303ページ)

「メシヤ無しに直接神に行けばいいではないか、なぜメシヤが必要なのか」と言う人がいるかもしれませんが、そうではありません。真の父母がいなくては、地上天国の中心が定まらないのです。地上天国ができなければ天上の天国も形成されないのです。(『ファミリー』一九八二年九月号、10ページ)

神様と真の父母に侍らなければなりません。神様は縦的な父母であり、完成したアダムとエバは横的な父母であつて、この二つの父母が一つになったその上で統一が成され、天国と神様が連結されるのです。ですから、神様と真の父母に侍らなくては何もできません。(八大教材・教本『天聖經』2316ページ)

「One Family Under God、神様の下の一家族」の世界とは、上述の『原理講論』やみ言で分かるように、神様と真の父母様のもとの「一家族世界」です。

ところが、『統一教会の分裂』は、「創始者は、家庭連合創設と共に宗教時代が終わり……神様の創造目的を成していく時代になったことを宣言した。……救世主、メシヤ、真の父母の使命が完遂された状態は、救世主、メシヤ、真の父母の存在する必要がないことを意味する」(46～48ページ)とか、一家族世界とは『神様を父母として侍る一つの血縁関係の大家族世界を志向する』という意味である」(62ページ)と述べており、その言説はみ言および『原理講論』と異なった主張となっています。

それゆえ、統一教会の核心アイデンティティを正しく表現するなら、それは神様と真の父母様を父母として侍る一家族世界であると言うことができます。

神様の復帰摂理が成就され、全ての人が原罪のない神様の血統へ転換されて人類一家族世界が実現されたなら、確かに救い主としてのメシヤ、救世主、真の父母は必要なくなります。しかし、たとえ救い主が必要のない理想世界が実現しても、その理想世界は神様と一体となられた真の父母を礎とする世界であり、人間始祖の立場である「真の父母」は永遠に存在し続けるのです。このように見たとき、金鍾奭氏の述べる顯進様の

「真の父母の存在しない One Family Under God」が誤りであることが分かります。

(2) 顯進様の「統一教会の伝統」に関するアイデンティティの問題点

問題点①—「復帰摂理の中心が創始者ではない」とする誤り
金鍾奭氏は、「統一教会の伝統」に関する顯進様のアイデンティティを次のように述べます。まず、『統一教会の分裂』から、顯進様のアイデンティティを引用します。

「第一に文顯進は、復帰摂理の中心が創始者ではなく、創造主である神様であることを主張する」(63ページ)

果たして、この主張は正しいのでしょうか。『原理講論』およびみ言を、以下引用します。

もしユダヤ民族が、イエスを信じかつ侍り奉って……いたならば、そのときにおいても彼らが立てた『メシヤのための民族的基台』の上に來られたメシヤを中心として、復帰摂理は完成されることになっていたのである。(282ページ)

「再臨主はイエス様が果たせなかった神様の復帰摂理の根本を完成するために來られます。すなわち、創造理想を完成すべき真なる本然の赤ん坊の種として來て、神様の真の愛、真の生命、真の血統の根源になる真の父母の理想を完成するために來られます。〔祝福家庭と理想天国(Ⅰ)〕43ページ」

以上のみ言と比較すると、金鍾奭氏が述べる顯進様のアイデンティティとお父様のみ言の間には、明確な食い違いがあります。

ることが分かります。

もちろん、復帰摂理は、墮落した人間を創造本然の人間に復歸していく神様の摂理であるため、そのような観点から見るとき、摂理の中心は神様であると言うことができます。しかし、注目すべき点は、金鍾奭氏の主張のうち「復帰摂理の中心が創始者ではない」と否定している部分です。

前述したように、『原理講論』は、「メシヤを中心として、復帰摂理は完成される」としており、み言にも「再臨主はイエス様が果たせなかった神様の復帰摂理の根本を完成するために來られます」とあり、復帰摂理の中心が、創造主である神様のみであると断言することはできません。むしろ、アダムとエバの墮落で失った「真の父母」を取り戻すため、「真の父母」ご自身が責任を果たし、勝利しなければならないという観点から見ると、復帰摂理の中心は「真の父母」であると言えるのです。

事実、『原理講論』は、「人間始祖がその責任分担を全うすることができなかったために、逆にサタンの主管を受けなければならぬ立場に陥ってしまった。それゆえに、人間がサタンの主管を脱して、逆にサタンを主管し得る立場に復歸するためには、人間の責任分担としてそれに必要な蕩滅条件を、あくまでも人間自身が立てなければならぬのである」(276、277ページ)と論述しています。それゆえ、人間始祖の立場で來られた「真の父母」の使命が極めて重要であるということはいくまでもありません。

ところが、金鍾奭氏は「復帰摂理の中心が創始者ではない」と否定します。彼の述べる「顯進様のアイデンティティ」の主張は、真のお父様の目指す理想世界と異なる「真の父母の必要ない世界」をつくり出すものであると言わざるをえません。

問題点②―「創始者を神様の実体として崇拝している」と批判する誤り

『統一教会の分裂』は、「第二に文顯進は……宗教的救援論の限界の中に創始者を閉じ込めてしまう統一教会の宗派的教理とアイデンティティを批判した。統一教会が創始者を創造主・神様と一体を成した存在、神様の実体として崇拝してきたのと違い、文顯進は創始者を創造主・神様の理想を実現する為に一生を捧げた『息子』として認識し、創始者をこうした次元のメシヤとして定義している」（63ページ）

さらに、「彼（注、顯進様）の認識は、復帰された人間と創造主である神様との関係を明らかにすることによって、創始者と韓鶴子を神格化しようとする既存の統一教会神学を批判する」（63ページ）と述べ、統一教会が「創始者を創造主・神様と一体の存在、神様の実体として崇拝」（同）していると論じています。これを真のお父様のみ言と比較し検証してみます。

神様がアダムとエバを造つた目的は、どこにあるのでしょうか。私たち人間の形状を見てください。体をもっています。しかし、無形の神様には体がありません。体をもたなければ、霊界の世界や地上世界を治めることができないのです。ですから、神様がいらっしゃるにしても、神様が人間の父母として現れるためには体をまとわなければならないのですが、その体をもった代表が誰かというと、アダムとエバなのです。墮落していないアダムとエバの体をもって現れるのです。それゆえアダムとエバは、人類の始祖であると同時に、天地を主宰する神様となるのです。実体をもった神様、すなわち永遠の無形世界の神様の形状を代わりにもって現れた立場で、父母の立場で世界

を統治する責任がアダムとエバにあったのです。（八大教材・教本『天聖經』124ページ）

アダムとエバが、心の中に神様をお迎えし、一体となって完成した上で、結婚して子女を生んで家庭を築いたならば……神様は、真の愛を中心としてアダムとエバに臨在されることにより、人類の真の父母、実体の父母としておられ、アダムとエバが地上の生涯を終えて霊界に行けば、そこでもアダムとエバの形状で、彼らの体を使って（神様は）真の父母の姿で顕現されるようになるのです。（『平和神經』54～55ページ）

以上のみ言から見ると、アダムとエバが完成し、真の父母となったなら、神様はアダムとエバに臨在され、真の父母は、実体の神様の立場になるということです。

ところが、金鍾奭氏は、「文顯進は創始者を創造主・神様の理想を実現する為に一生を捧げた『息子』として認識し、創始者をこうした次元のメシヤとして定義している」と述べており、その主張は、「アダムとエバは、人類の始祖であると同時に、天地を主宰する神様となる」という真のお父様のみ言と食い違っています。

また、金鍾奭氏は、「統一教会が創始者を創造主・神様と一体の存在、神様の実体として崇拝してきた」と批判的に述べます。しかし、『原理講論』は次のように論じます。

再臨主は、旧約と新約のみ言を完成するための、新しいみ言をもつてこられる方である。ゆえに、完成復活摂理は、新旧約を完成するために下さる新しいみ言（成約のみ言）……を、人間たちが信じ、直接、主に待つてその責任分担を完遂し、義を

立てるように摂理なさるのである。それゆえに、この時代を待義時代ともいう。(219ページ)

金鍾奭氏は、真の父母様を「崇拜してきた」と論じますが、『原理講論』の記述のように、完成復活摂理とは直接メシヤ（真の父母）に侍って義とされる侍義時代であり、侍ることで救いを完成させる時代です。それを、よりの確に表現するなら、統一教会（家庭連合）は真の父母に侍っているものであって、金鍾奭氏が述べるように、ただ単に「崇拜している」ではありません。

『統一教会の分裂』を検証すると、UCIを支持する人々は統一教会の「アイデンティティ」を間違って理解している事実が明白になります。そして、同書の「統一教会のアイデンティティ」が、顯進様の理解する「統一教会のアイデンティティ」に基づいて構成されていることからすれば、顯進様が理解する「統一教会のアイデンティティ」は間違った主張であるという事実が明らかになります。

また、メシヤについても、「創始者を創造主・神様の理想を実現する為に一生を捧げた『息子』」であると定義します。しかし、『原理講論』やみ言は次のようになっています。

元来、神がアダムとエバを創造された目的は、彼らを人類の真の父母に立て、合性一体化させて、神を中心とした四位基台をつくり、三位一体をなさしめるところにあった。もし、彼らが墮落しないで完成し、神を中心として、真の父母としての三位一体をつくり、善の子女を生み殖やしたならば……神の三大祝福完成による地上天国は、そのとき、既に完成された。(267ページ)

皆さん各自の血統的内容が違い、背後が違っているとしても、父母と似るためには接ぎ木する役事を行わなければなりません。……接ぎ木しようとするれば、皆さん自身が残された蕩滅路程をすべて清算しなければなりません。それは、父母から始めたので、父母を通して清算されなければなりません。ですから、真の父母に接ぎ木しなければならぬのです。アダムは、真の父母になることができず、偽りの父母となつたので、今まで神様は、真の父母を探し求めてこられたのです。(八大教材・教本『天聖經』1742ページ)

この世の中に一つの真のオリーブの木の標本を送ろうというのが、メシヤ思想です。ところで、真のオリーブであるメシヤ一人が来てはいけません。サタン世界が夫婦を中心として社会を形成し、国家を形成したので、メシヤが一人で来ては、真のオリーブの木になりません。メシヤとしての真のオリーブの木と、メシヤの相対となる真のオリーブの木を中心として、これが一つになってこそ、真のオリーブの木として実を結ぶことができます。(天一国経典『天聖經』183～184ページ)

上記のみ言を要約すると、メシヤは「神の創造目的」を完成するために来られるのであり、その三大祝福を完成するには、真のお父様お一人では成しえないのです。すなわち、再臨主は「小羊の婚宴」を成して「真の父母」にならずして、創造目的を成就できません。

金鍾奭氏は、「文顯進は創始者を創造主・神様の理想を実現する為に一生を捧げた『息子』として認識し、創始者をこうした次元のメシヤとして定義している」と主張しますが、その思想は、神のみ旨を成就される「真の父母」という観点から見

れば、根本的に誤った言説であると言わざるをえません。

前述したみ言に、「神様と真の父母に侍らなければなりません。神様は縦的な父母であり、完成したアダムとエバは横的な父母であって、この二つの父母が一つになったその上で統一が成され、天国と神様が連結されるのです。ですから、神様と真の父母に侍らなくては何もできません」（八大教材・教本『天聖經』2316ページ）とあるように、理想世界を実現するには、神様だけを中心とするのでは天国（天一国）は連結されず、どこまでも「二つの父母が一つになったその上で統一が成され、天国と神様が連結される」ということを知らなければなりません。したがって、真のお父様と共に真のお母様も「真の父母」として神様の創造理想を実現するために一生をささげてこられ、今なお歩んでおられるのです。このような事実を踏まえると、『統一教会の分裂』は意図的にみ言を操作し、お母様の存在をおとしめようとしているものと言わざるをえません。

以上、この書籍が述べる「統一教会のアイデンティティ」が、顯進様の主張に基づいて構成され、UCIを支持する人々がこの書籍を積極的に広めていることを見ると、この書籍の内容は、顯進様の主張を「代弁」していることは明らかです。しかし、その内容は、真のお父様の思想とはことごとく異なったものとなっています。

私たちは、この書籍がそのように一方を代弁する立場で書かれていることをはっきりと知り、何かの機会にその内容に触れることがあったとしても、以上の真の父母様ご自身のみ言に基づいた視点を決して見失ってはなりません。

七、UCIを支持する人々が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴く（3）

——金鍾奭氏が主張する「アイデンティティ」の誤り・その2

問題点③——「真の家庭のアイデンティティ」の誤り

（1）真の家庭を、真の子女様家庭としている誤り

まず、問題となる『統一教会の分裂』の部分を引用します。文顯進は『真の家庭』の価値と役割を明らかにしている。

真の家庭を統一教会創始者（注、真のお父様）の直系の家庭と定義しながらも、『拡大された真の家庭』という用語を使って真の家庭の意味を拡大している。『神様↓真の父母↓真の家庭↓拡大された真の家庭』に連結される絶対者の血統の拡大過程において創始者の真の家庭（直系家庭）の責任を強調した。彼にとつて『真の家庭』は、完成すべき復帰摂理の一次目的であり、真の父母出現の理由であり、人類全体が志向すべき神様の第一の理想である。……真の家庭は人類を代表する家庭であると同時に人類のモデル的家庭であり、復帰摂理の為に全ての犠牲を甘受しなければならず、神様の理想実現の為の実体的生き方を生きなければならないと彼は主張する。（63ページ。太字は教理研究院による。以下同じ）

現在、文顯進は、前に言及した通り、「神様↓真の父母↓真の家庭↓拡大された真の家庭（祝福家庭）」と繋がる血統復帰の価値を固守しており、超宗教的な奉仕と理想家庭実現の為の平和理想世界実現運動を「One Family Under God」の名前で展開している。ところが、文顯進も真の家庭（創始者の直系

家庭」の血統が全人類に伝授される（何らかの）儀礼としての手段が必要だったものと見られる。それ故か、二〇一五年六月に米国シアトルで祝福結婚式を主管したという。推測すると彼は、創始者が今まで示してきた血統復帰の為の伝統や儀礼を、普遍的で世界化された儀礼にデザインし直して引き継いでいくように見られる。（66ページ）

「神様の血統」が「神様↓真のお父様（創始者）↓真の家庭（文顯進家庭）↓統一教会の祝福家庭↓人類」につながる「血統復帰信仰」も強く要求しているという事実注目しなければならぬ。（315ページ）

彼らは、真の家庭のアイデンティティを「直系家庭」と定義しており、この「真の家庭＝直系家庭」こそが「復帰摂理の一次目的」「真の父母出現の理由」であり、「神様の第一の理想」「人類を代表する家庭」「モデル的家庭」「真の愛、真の生命、真の血統を具体化する家庭」「全人類に接ぎ木する家庭」であると主張します。彼らが主張する、真の家庭のアイデンティティは、真の父母様が絶対中心ではなく、神、父母、子女の三代目である真の子女様家庭をして、「真の家庭＝直系家庭」であると定義するのです。

文顯進様は、その著書『神様の夢の実現』でも「祝福家庭として皆さんのアイデンティティは神様、真の父母様、そして真の家庭の縦的な軸に連結されることによって始まる」（『統一教会の分裂』65ページ。注：『神様の夢の実現』の日本語訳は261ページ）と述べ、ここでも「真の父母様」と「真の家庭」を分けて語っていることからその事実が理解できます。さらに文顯進様は、二〇一一年十二月一日の韓国GPCでも、「真の父

母と真の家庭の出現は、アダム・エバ家庭が成し遂げられなかった神様本然の真の愛のモデル家庭を回復し、地上に天国を成すためにある」（『統一教会の分裂』302ページ）と述べ、「真の父母」と「真の家庭の出現」を分けて語っています。彼らが言う「真の家庭」とは「直系家庭＝文顯進家庭」を指しているのです（同、315ページ）。

ところで、真のお父様は、真の家庭とは何かについて「真の家庭とは何ですか。そこには真の父、真の母、真の夫、真の妻、真の子女がいるのです。それが真の愛の家庭基盤です」（八大教材・教本『天聖經』2153ページ）と語っておられます。真の家庭と言うとき、必ずそこに「真の父」「真の母」が入らなければなりません。真の父母を絶対中心にしていない「真の家庭＝文顯進家庭」の主張は誤りです。

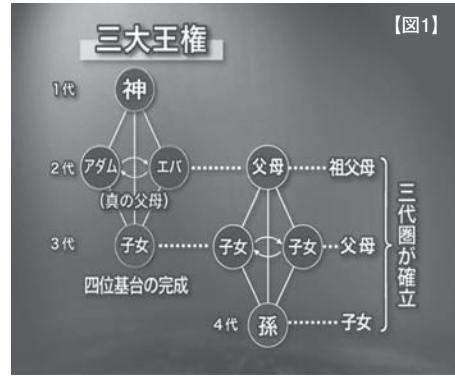
（2）三代圏の中心は真の父母様であって、真の子女様ではない

ここで明確にしておかなければならないことは、真の家庭の三代圏の中心は、人類の真の父母であられる「祖父母」（真の父母様）という点です。

三代圏の中心は子女様でも、お孫様（四代目）でもありません。【図1】を見れば分かるように、神から始まる三大王権が、真の父母を中心として展開されていく三代圏に対して、真のお父様は次のように語っておられます。

おじいさん、父、自分たち夫婦が、三大王権を象徴します。

おじいさんは過去を象徴し、父母は現在を象徴し、自分たち夫婦は未来を象徴します。そして、おじいさんは霊界の特権大使



「三大王権」および真の家庭の「三代図」

として自分の家庭に送られた方なので、おじいさんの言葉に絶対服従する家庭は繁栄します。(八大教材・教本『天聖經』2348ページ)

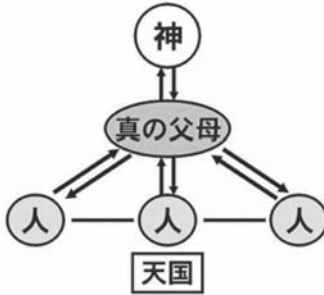
神様は祖父母の位置であり、アダムは父母の位置であり、子女は息子、娘の位置です。同じように、皆様の家庭でも三代が一つの家庭に安着すれば、祖父母は、天上天国の神様の位置であり……。 (『平和神經』314ページ)

さらに『原理講論』は、神様の創造理想が完成した天国について、「天国においては、神の命令が人類の真の父母を通して、すべての子女たちに伝達されることにより、みな一つの目的に向かって動じ静ずるようになる」(69ページ)と論じています。

創造理想を完成した世界(天一国)における永遠の中心は、神様と完全一体になった人類の真の父母様であって、その真の父母を中心に「一つの目的に向かって動じ静ずる」世界こそが理想世界です。その中心は真の父母であって、真の子女様ではありません【図2】。

顯進様は、本来の血統であり、真の家庭の一員ではありませんが、み旨の中心ではありません。人類の罪悪歴史の蕩滅復帰も、人類の救済も、宇宙の再創造も、人間始祖の立場である真の父母様によってなされ、完成、完結、完了するのです。

創造目的完成



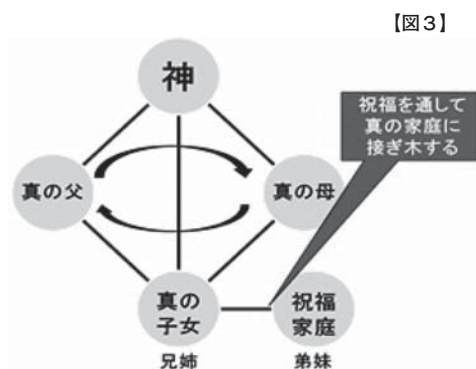
創造目的を完成した世界

それを神学的に表現すれば、キリストを抜きにして完全な神認識も救いもないということになります。

宇宙の永遠の中心は、どこまでも神様と完全一体となられた真の父母様(天地人真の父母様)です。したがって、真の家庭の三代図(三大王権)は、真の父母様に直結してこそ意味があるのであり、神の創造理想を成し遂げることができるのです。

ところが、『統一教会の分裂』では、「真の家庭の中でこそ、真の愛、真の生命、真の血統を実体化することができる」と主張し、直系家庭である「真の家庭(文顯進様家庭)」こそが真の愛と真の生命と真の血統を実体化した家庭であるとし、「神様の血統」は「神様↓真のお父様(創始者)↓真の家庭(文顯進家庭)↓統一教会の祝福家庭↓人類」(315ページ)としてつながっていくと主張します。この主張は、「祝福」が真の父母様に「接ぎ木(重生)」されることで救われるのではなく、「真の家庭=直系家庭」である子女様に「接ぎ木」されることで、墮落人間の血統復帰が成され、人類が救われていくかのような主張になっっています。これは、真のお父様のみ言と異なる誤った言説です。

顯進様は、真の父母様の許諾を受けないで「二〇一五年六月に米国シアトルで祝福結婚式」(66ページ)を挙行しました。その言動からも、この真の家庭のアイデン



櫻井正実氏による講義の図

ティティ」という誤った認識に基づいて行動している事実が分かります。

そして、この誤った「真の家庭のアイデンティティ」ゆえに、『統一教会の分裂』は「今のままでは、韓鶴子以降の統一教会が真の家庭（直系家庭）のない統一教会になることは明らかだ」（321ページ）と主張しているのです。

（3）櫻井正実氏の「祝福家庭特別セミナー」の主張の誤り

UCI側が開催する「祝福家庭特別セミナー」の HALF デイで、櫻井正実氏は【図3】を使って「祝福を通して真の家庭に接ぎ木する」と講義しています。

この【図3】で「祝福を通して真の家庭に接ぎ木する」と表現している「真の家庭」とは、すでに前項でも述べたように、真の子女様家庭のことであり、具体的には、顯進様家庭を指しています。

櫻井正実氏の HALF デイセミナー DVD の 1 巻目の 11 分 50 秒あたりから、彼は次のように語っています（以下、ディクテーション）。

「真の父母様だけでは、祝福は行うことができない。真の父母様に真の子女様がいてこそ祝福を行うことができる。真の家

庭に、祝福を通して真の家庭に接ぎ木されるんだということなんです。真の父母という言葉自体も、真の子女様を前提にしている言葉であります。

櫻井正実氏はこのように説明し、次のみ言を引用します。「メシヤの使命は、そこで終わるものではありません。真の父母の位置まで進んで、絶対的の真の家庭を探し立てなければなりません。この真の家庭を中心として、神様の創造理想を完成した地上天国と天上天国を創建することができるのです。この目的のために墮落の末裔である 60 億人類は、その誰も例外なく、出来が良くても悪くても、黒人でも白人でも例外なくメシヤの真の家庭に接ぎ木されなければなりません。絶対的要件です」（マルスム選集 478-1285）

さらに、櫻井正実氏は DVD の 1 巻目の 23 分 53 秒から、「父の血統と権威を代表する長子が立つことによって、お父様一代で地上天国を成すことができなかったとしても、それを受け継ぐ父の血統と権威を代表する長子が立つことによって、摂理的中心人物という求心点をもって理想世界を創るその摂理を続けていくことができるわけです」と語っています。この主張は『統一教会の分裂』と同じです。UCI 側は「祝福を通じて真の家庭に接ぎ木される」と主張しますが、彼らが言う真の家庭とは顯進様家庭であり、その子女様家庭に接ぎ木されることで「血統復帰」がなされると考えているのです。

ところで、櫻井正実氏が引用したマルスム選集のみ言（478-1285）は、真のお父様が二〇〇四年十二月二日に語っておられる「真の父母は神様と人類の願い」の講演文を、お父様ご自身が解説しながら語られたみ言です。

櫻井正実氏はそのみ言を引用し「メシヤの真の家庭に接ぎ木」

すると述べますが、その「真の家庭」が何を指すのか、真のお父様のみ言によって明確にしなければなりません。み言のもととなる「講演文」を以下、引用します。

メシヤの使命はここで終わるのではないのです。真の父母の立場まで進んで、絶対的な真の家庭を建てなければなりません。この真の家庭を中心として、神様の創造理想を完成した地上天国と天上天国が創建できるのです。この目的のために墮落の末裔の60億の人類は、誰も例外なくメシヤの真の家庭に接ぎ木しなければなりません。心情的な接ぎ木はもちろん、伝統的な接ぎ木をしなければなりません。

それなら、どのように接ぎ木をするのでしょうか。皆様すべては墮落性を持って生まれた野生のオリーブの木です。野生のオリーブの木は百年千年を待っても、真のオリーブの木に変わる突然変異は起きないのです。永遠に野生のオリーブの木として残るだけです。(二〇〇四年十二月二日の講演文)

櫻井正実氏は上述の講演文のうち、お父様が「メシヤの真の家庭に接ぎ木しなければなりません」までを解説された箇所を引用します。ところが、櫻井氏が引用していない続きの部分に、お父様が「接ぎ木」について解説された箇所があります。以下、その部分を引用します。(注、講演文は太字ゴシック、それに対するお父様の解説は明朝体)

……『同じように、墮落した人類は罪惡のサタン世界と完全に絶縁して、真のオリーブの木であられる真の父母を通して真のオリーブの芽を植える』接ぎ木されるのです。『結婚祝福を受けて、真なる血統を出発させなければならないのです。そ

のようにして出発した真の血統は、真のオリーブの実である真の子女を生産するようになるのです。墮落人間としては、この道だけが真の父母の愛を通して再び生まれ、真の生命、真の愛、真の血統を相続できる唯一の道なのです。このように、真の子女が生まれて真の父母ができれば、自動的にそこには真なる家庭が定着するのです。ここからまさに真の家庭主義が創出されます』……。 (マルスム選集478-285)

真のお父様は、「メシヤの真の家庭」に「どのように接ぎ木をするのでしょうか」と尋ねられ、その答えとして「墮落した人類は罪惡のサタン世界と完全に絶縁して、真のオリーブの木であられる真の父母を通して真のオリーブの芽を植える」と講演文を読まれ、「接ぎ木されるのです」と解説しておられます。ここで言う「メシヤの真の家庭」とは、真のオリーブの木である「真の父母様」のことであり、子女様家庭ではありません。ゆえに、真の家庭を「直系家庭」であると定義する「真の家庭のアイデンティティ」は誤りであるのが分かります。

(4)「重生」は、真のオリーブの木であられる「真の父母」によってなされる

さらに、真のお父様が語られる「真のオリーブの木」が何を意味するのか、み言に基づいて理解しておかなければなりません。

墮落人間が生命の木となるためには……創造理想を完成した一人の男性が、この地上に生命の木として来られ、すべての人をして彼に接がしめ、一つになるようにしなければならない。このような生命の木として来たり給うたお方が、すなわちイエ

スであった。(『原理講論』95ページ)

天の真の血統をもってこられた真の父母様を通して祝福結婚を受けることが、正に真のオリーブの木に接ぎ木される恩賜です。(『平和神経』34ページ)

このみ言から分かるように、「メシヤの真の家庭」に接ぎ木されなければならないと語られるその真の家庭とは、真の子女様家庭ではなく、「真のオリーブの木」であられる真の父母様です。祝福は、真のオリーブの木であられる真の父母様に接ぎ木されることによって成されるのです。UCIを支持する人々は「祝福を通して真の家庭に接ぎ木される」とは「直系家庭の文顯進様家庭に接ぎ木される」とことと主張しますが、その言説は誤りであることを知らなければなりません。

「祝福」を通じた「重生」に関するみ言を『原理講論』および『祝福家庭と理想天国(Ⅰ)』から引用します。

父は一人です。どうして子女を生むことができるだろうか。墮落した子女を、善の子女として、新たに生み直してください。ために、真の父と共に、真の母がいなければならない。(『原理講論』264～265ページ)

イエスは自ら神を中心とする実体的な三位一体をつくり、霊肉共に真の父母となることによって、墮落人間を霊肉共に重生させ、彼らをして原罪を清算させて、神を中心とする実体的な三位一体をつくらせるために再臨されるのである。(同、268ページ)

父母に似るためには、接ぎ木する役事をしなければなりません。ひっくり返して接ぎ木しなければなりません。……それは父母から始まったので、父母を通して清算されなければならないとせん。それで、真の父母に接ぎ木しなければならないというのです。(『祝福家庭と理想天国(Ⅰ)』697～698ページ)

これらのみ言は、墮落人間が「真の父母」によって重生されることを明確に述べています。『原理講論』は、重生や原罪清算について「霊肉共に真の父母となることによって、墮落人間を霊肉共に重生させ、彼らをして原罪を清算させて、神を中心とする実体的な三位一体をつくらせる」と論じます。この墮落人間を重生させる「霊肉共に真の父母」とは、神様を中心とした実体的三位一体であられる真の父母様です。『祝福家庭と理想天国(Ⅰ)』には「父母に似るためには、接ぎ木する役事をしなければなりません。……真の父母に接ぎ木しなければならない」とあります。墮落人間が重生され、原罪清算できる唯一の道は、真の父母様に接ぎ木されることです。決して、真の子女様ではありません。真の父母様こそが「真のオリーブの木」であり、「真の家庭」の絶対中心です。

ゆえに、今後、もし真のお母様が聖和ソフツされることがあったとしても、「祝福」の絶対中心は、永遠に神様と真の父母様であり、血統転換は真の父母を通してなされていくのです。神様と一体となられた真の父母様が天上・地上天国の永遠の中心です。したがって、『統一教会の分裂』が主張するような、「今のままで、韓鶴子以降の統一教会が真の家庭のない統一教会になる」(321ページ)ということはありません。

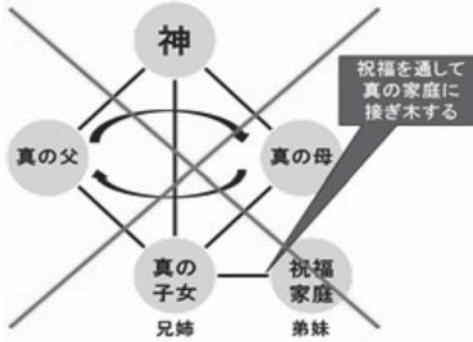
UCIを支持する人々は、真の父母を絶対中心とせず、真の子女様家庭にアラインメント(方向性を合わせて一つになる)

することだけを力説し、真の父母様不在の「真の家庭のアイデンティティ」を主張しているために、以上のような誤った言動とならざるをえないのです。

櫻井正実氏が講義で使用している図は、誤りであることを明確に理解しなければなりません。真の父母様が、絶対、唯一、不変、永遠なる存在であり、真の父母様を通じてこそ墮落人間は重生され、新たに真の子女として誕生し、真の家庭（祝福家庭）となるのです。

ところが、櫻井正実氏がUCIを支持する人々のセミナーで使用する図は、祝福家庭の位置が真の父母様と関係を結んでいないだけでなく、真の子女様だけに待る表記になっています。そして、祝福を通じて真の子女様家庭である文顯進様家庭（真の家庭）に接ぎ木するという誤った説明がなされる始末です。

UCIを支持する人々の、真の家庭を「真の子女様家庭」とする誤った解釈による、真の父母を絶対中心としない「真の家



櫻井正実氏による「接ぎ木」の誤った図

庭のアイデンティティは、真の父母様の亡き後の地上の「統一家庭」の在り方として、み言を正しく理解しない食口のみならず、信仰歴の長い諸先輩さえも信仰の混乱に陥らせる要因となりかねません。私たちは、UCIを支持する人々の主張する真の父母を絶対中心としない「真の家庭のアイデンティティ」に惑わ

されてはなりません。

(5) 祝福家庭がアラインメントすべきは、「天の父母様—真の父母様」である

——櫻井節子氏による「信仰告白」の映像の問題点

櫻井正実氏が主張する「真の子女様家庭」に「接ぎ木」するという誤った理解による図を、正しく表現するとすれば【図4】のようになるでしょう（次のページ参照）。

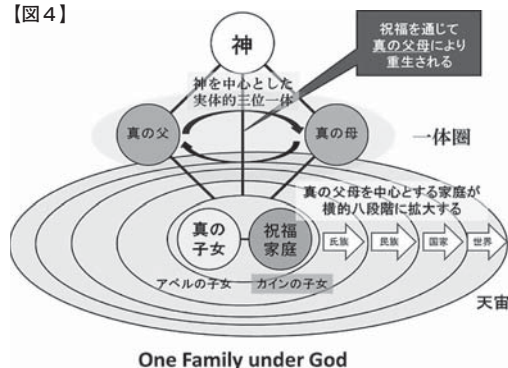
「祝福」による「接ぎ木（重生）」とは、あくまでも真の父母様によってなされるのであって、真の子女様ではありません。家庭連合からの脱会を表明した櫻井節子氏（四十三双）は、UCIが公開した映像で次のように語っています。

息子の正実と話していたときにですね、顯進様の基盤となるべき第一の責任は、私たち四十三双にあったんではなかったかと思いました。……なぜならば、私も四十三双が祝福にあずかったとき、お母様のお腹のなかにいらしたかたが顯進様でございました。ですから、私も四十三双にとりましては（顯進様が）直接的なお兄様です。

櫻井節子氏が、こう述べた背景には、櫻井正実氏の講義図の「祝福を通して真の家庭（真の子女様家庭）に接ぎ木する」という誤った認識、さらには真のお父様が語られた重生（生まれ変わる）に関する次のみ言があったものと思われるます。

既に肉身をもって生まれ成長してしまった私たちは、文字

【図4】



祝福を通じて「真の父母」により重生される

櫻井節子氏は、このみ言に基づいて「顯進様の基盤となるべき第一の責任は、私たち四十三双にあった」と語っているものと思われる。しかし、祝福家庭が、真の子女様と一体化する条件を立てるのは、どこまでも「真の母」の胎中を通して、「真の父」の骨髄にある種の立場に入っていくためであり、真の子女様によって生み変えられるのではありません。

どおり完成したアダムの体中の種の立場に戻ることはできません。それゆえ私たちは真の父母、およびその父母から生まれた真の子女と一体化することによって、生まれ変わるための条件を立てていくのです。カインがアベルに完全に屈服することによって、両者がすべて復帰されるという原理があるので、この原理により私たちカインの立場にある人間は、アベルの立場にある真の父母、罪のない真の子女と一体化しなければなりません。彼らと一体化することによって、私たちは復帰された子女として同じ恵沢を受けることができるのです。……女性はすべて、真の父と真の母とその真の娘と一つにならないといけません。それでは男性はどうでしょうか。真の父母とその真の息子と一つにならないといけません。（『真の御父母様の生涯路程④』107～108ページ）

重生（接ぎ木）に関して、真のお父様が「子供はどのようにしてつくられますか。お父さんとお母さんを通してつくられます。皆さんは、お父さんの骨の中と、お母さんの腹の中を通してつくられたことを知らなければなりません」（『祝福家庭と理想天国（Ⅰ）』689ページ）と語っておられるように、どこまでも「真の母」の胎中を通して生み変えられるのであって、真の子女様が私たちを生み変えてくれるわけではありません。事実、一九八八年の六五〇〇双の祝福、さらには、世界的祝福である三万双、三十六万双、四千万双、およびそれ以降の祝福において、真の子女様が「真の母」の胎中に宿っておられたわけではありません。しかし、六五〇〇双以降の祝福も重生は成されているのです。

【図4】を見ると分かるように、重生（接ぎ木）は、神様を中心に実体的三位一体をなしておられる「真の父母様」によってなされ、そうして生み変えられた祝福家庭はカインの子女となり、直系のアベルの子女様と兄弟姉妹の関係なのです。

UCIを支持する人々は、真の子女様家庭とのアラインメントを力説しますが、私たちが本当にアラインメントすべきかたは神様と真の父母様です。真のお父様は次のように語っておられます。

神様と真の父母に侍らなければなりません。神様と真の父母が縦的な父母と横的な父母であり、二つの父母が一つになることによって、初めて私が出てくるのです。神様は縦的な父母であり、完成したアダムとエバは横的な父母であって、この二つの父母が一つになったその上で統一が成され、天国と神様が連結されるのです。ですから、神様と真の父母に侍らなくては何もできません。（八大教材・教本『天聖經』2316ページ）

真のお父様が、「神様と真の父母に侍らなくては何もできません」と語っておられるように、神様—真の父母様—祝福家庭というように、私たちを重生（接ぎ木）してくださる真の父母様にしっかりとアラインメントしなければならぬのです。

櫻井正実氏が描く【図3】は、『原理講論』の論じる「創造目的完成」を表す【図2】と一致しません。一方、神様と真の父母様を中心とする「人類一家族世界（One Family under God）」を表現する【図4】は【図2】と一致しています。

創造理想世界は、「神の命令が人類の真の父母を通して、すべての子女たちに伝達されることにより、みな一つの目的に向かって動じ静ずる」（『原理講論』69ページ）世界でなければなりません。しかし、櫻井正実氏が描く図は子女様を中心としているために、そのような世界になっていないのです。

私たちは、子女、孫、ひ孫へと何世代を経ても、また何百年、何千年、何万年を経ても、神様と真の父母様を絶対中心として一つになることが「統一原理」の教えであり、不変の原理原則なのであって、世代が移るたびにその「中心」が真の子女様、お孫様、ひ孫様へと変わっていくではありません。もし「中心」が移り変わっていくとするなら、その世界は分裂と闘争の世界とならざるをえません。真のお父様は次のように語っておられます。

アダムもエバも神様をお父さんと呼びます。では、その子女たちは神様を、おじさんと呼びますか、おじいさんと呼びますか。お父さんと呼びます。相対というのは、平等なものです。神様の愛を横的に繁殖し、その愛の価値を完成しなければなりません。完成した愛の価値は、一つです。平等なのです。（八

真のお父様が語っておられるように、私たちも、私たちの子女の世代も、さらに孫もひ孫の世代も、何世代を経ようが、永遠に変わらずに神様を「天の父母様」と呼び続けていくのです。

「人類一家族世界（One Family under God）」は、神様と真の父母様を中心に、横的八段階として拡大される世界であって、私たちがアラインメントすべき「縦的軸」は、永遠に神様と真の父母様だけであることを知らなければなりません。

櫻井正実氏の「真の子女様家庭」にアラインメントするという図【図3】は、祝福家庭の位置が、神様—真の父母様にアラインメントしていないだけでなく、真の子女様からお孫様、さらにひ孫様へ世代が移るたび、「天の祖父母様」「天の曾祖父母様」と呼び方が変わってしまい、その「中心」も移り変わってしまう図になっています。これは、「真の父母」から真の子女、真の孫へと世代が移るたび、その中心が変わることを意味する問題の多い図です。そのような世界では、世代が移るたびに「摂理の中心」はどこなのか、絶えず探し続けていかなければならない、流浪し続ける人類となっています。

櫻井節子氏は、家庭連合からの脱会を表明する映像の中で、『原理講論』の終末論から、次の部分を引用しています。

「新しい時代の摂理は、古い時代を完全に清算した基台の上で始まるのではなく、古い時代の終末期の環境の中で芽生えて成長するのであるから、その時代に対しては、あくまでも対立的なものとして現れる」（173ページ）

『原理講論』のこの記述は、旧約時代から新約時代への摂理の飛躍、そして新約時代から成約時代への摂理の飛躍について

述べているのであって、人類の真の父母が現れたならば、その「中心」が移り変わっていくことは二度とありません。真のお父様は、次のように語っておられます。

今日、皆さんが知るべきことは、過去や、現在や、未来において永遠にたたえられ得るその名前とは何かということです。それは、真なる父母、『真の父母』です。……『真の父母』という名前が出てくることによって、神様の創造理想世界、エデンの園から出発すべきだった永遠の未来の天国が、ここから出発するのです。その事実が歴史であり、時代的であり、未来的なのです。それゆえ、過去、現在、未来の全体の歴史をひっくるめて見るとき、この地上に顕現した『真の父母』は、宇宙の中心を決定する中心ポイントであるということを、皆さんは知るべきです。（八大教材・教本『天聖經』227ページ）

櫻井節子氏が『原理講論』の終末論から「新しい時代の摂理は……あくまでも対立的なものとして現れる」という一節を引用しているのは、事実上、真の父母様から、顯進様家庭にその「信仰の中心」を変えてしまったからにほかなりません。私たちは、神様と真の父母様に永遠の中心を置くべきであり、それ以外のところに「信仰の中心」を置くべきではありません。

二〇〇九年三月八日、いわゆる「束草事件」のとき、真のお父様は顯進様に対し「顯進、おまえも別の所に行かず、父の所に来て、父に付いて回りなさい」（マルスム選集609-133）、「孝律！（はい。）」今、処置したものは全てわかりますね。

（はい、全て書きました。）書いたものを総括的に一度話して：（顯進様はUPF会長とGPFから一年間休み、金起勳牧師が代わりにするようになりました。顯進様はその間、真の父

母様に対する学習、カイン・アベルの関係を勉強しなさいと言いました。）金起勳が顯進の上にいるので長となり、顯進が待つて協助する立場に立つのです」（同、609-134）と語られました。

前項でも、顯進様のアイデンティティの誤りを指摘しましたが、真のお父様が顯進様を教育しようとしておられた内容の一つは、この誤った「真の家庭のアイデンティティ」に関してではなかったか、と強く感じられます。

八、UCIを支持する人々が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴く（4）

——金鍾奭氏が主張する「アイデンティティ」の誤り・その3

【問題点④——祝福家庭を「養子養女」とする誤り】

まず、金鍾奭著『統一教会の分裂』（日本語訳）の問題となる部分を引用します。

「特異な事実とは、文顯進の血統認識にある。……文顯進は自分を神様の血統が復帰された人類最初の真の家庭の一員として自分の血統を絶対的次元で認識しており、祝福家庭を真の家庭に『接ぎ木されて神様の血統』に復帰された拡大された真の家庭であり、養子養女の家庭であると認識する」（65ページ）
注・太字は教理研究院による

上述の内容によれば、「真の家庭を真の父母様の直系の家庭」と定義し、祝福家庭を「拡大された真の家庭であり、養子養女の家庭」と述べており、神の血統が「神様—真の父母—真の

家庭へ拡大された真の家庭」として連結されると主張しています。しかし、この主張は「原理」と食い違った内容となっています。『原理講論』を引用します。

いくら信仰の篤いキリスト教徒でも肉的に継承されてきた原罪を清算することができないままでは、サタンの血統を離脱できなかったという点においては、旧約時代の信徒たちと何ら異なるところがないのである。このように、キリスト教徒たちは、神と血統を異にする子女であるので、神の前では養子とならざるを得ないのである。(431ページ)

このように、霊的眞の父母であるイエス様と聖霊による「霊的重生」による新約時代の救いによってクリスチャンたちはすでに「養子」の立場になっているというのが、『原理講論』の教えです。

したがって、イエス様が果たせなかった墮落人間の「原罪清算」を成し遂げ、墮落人間に長成期完成級を越えさせて神の血統に生み変えるため、再臨主が来られることを、次のように『原理講論』は明言しています。

神の復帰摂理の目的は、このように神との血統関係が断たれてしまった墮落人間を復帰して、神の直系の血統的子女を立てようとするところにあるのである。……イエスは、原罪のない、神の血統を受けた直系のひとり子として来られ、墮落したすべての人類を彼に接がせて一体となることにより、彼らが原罪を脱いで神の直系の血統的子女として復帰することができるよう摂理しようとしてこられたのである。……しかし、弟子たちまでが不信に陥ったために、イエスは、洗礼ヨハネの立場から、

一段上がってメシヤの立場に立つことができないままに、十字架で亡くなられたのである。……それゆえに、イエスは、すべての人類を、神の血統を受けた直系の子女として復帰するために、再臨されなくてはならないのである。(430～432ページ)

このように、再臨主は、墮落人間の原罪を清算し、「神の血統を受けた直系の子女として復帰するために、再臨されなくてはならない」というのです。再臨主によってもたらされる救いとは、新約時代の「養子養女」の救いのレベルではありません。眞のお父様のみ言を引用します。

霊界にいる人々も、眞の家庭が必要です。その眞の家庭がなければ、神様の位置に連結されず、天国に入っていくことができません。地上天国で暮らした夫婦も、あとから天国に入っていくようになります。……その家庭は、誰によるものでしょうか。眞の父母の家庭です。今までのすべての家庭は、偽りの血統で連結されていました。本然の家庭ではなかったのです。祝福家庭が現れることによって、神様の血統が連結された眞の家庭が生まれるようになったのです。(八大教材・教本『天聖經』2171ページ)

「天一国主人、私たちの家庭は眞の愛を中心として、本然の血統と連結された為に生きる生活を通して、心情文化世界を完成することをお誓い致します」……家庭盟誓の七節が重要です。簡単ではあっても重要なのです。「私たちの家庭は眞の愛を中心として、本然の血統と」です。本然の血統です、墮落してはいないアダムの、墮落と全く因縁のない本然の血統を受け継いで、

「本然の血統と連結した心情文化世界を完成することをお誓い致します」です。私たちの世界は、心情文化世界です。(同2391ページ)

金鍾奭氏は、顯進様の認識をもとに、真の父母様の祝福によって「血統転換」された祝福家庭に対して、それを「養子養女の家である」と主張しています。養子養女とは、血統が繋がった直系ではなく血統が異なっていることを意味しています。確かに、祝福家庭は、真の父母様の直系家庭と、生物学的な意味での血筋のつながりがないために、「養子養女の家」と言われると、そのように思ってしまう人がいるかもしれません。しかし、『原理講論』にあるように、真の父母様から祝福を受けて「血統転換」された祝福家庭は、すでに神の血統と連結した立場なのです。

したがって、真の父母様の直系の子女様と祝福家庭とは、同じ真の父母から生まれたアベルとカインであり、同じ父母を中心とした兄弟姉妹なのです。金鍾奭氏が述べる顯進様のアイデンティティの「祝福家庭を真の家庭に『接ぎ木されて神様の血統』に復帰された拡大された真の家庭であり、養子養女の家である」と認識する」という主張は、原理的にも、真のお父様のみ言から見ても誤っています。

祝福家庭は、「拡大された真の家庭」ではなく、「皇族」として、真の父母様を中心とする真の家庭に血統的に連なっている一員なのです。

真のお父様は、「真の父母の血族にならなければなりません。血統が連結されたものは、父子関係です。真の父母の真の子女にならなければなりません。それが祝福家庭です。アダム家庭で墮落してこのようになったので、反対にひっくり返したのが

祝福家庭です」(天一国経典『天聖經』929ページ)と語っておられ、祝福によって「血統転換」された祝福家庭に対して、明確に「真の父母の真の子女にならなければなりません。それが祝福家庭です」と語っておられます。金鍾奭氏が顯進様の認識として言うような、祝福家庭は真の父母様の「養子養女」ではありません。

『原理講論』には、「家庭は父母がいて初めて成り立つのである。また、そこにおいてのみ、真の兄弟愛は生まれてくるのである。したがって、今や人類の親であるイエスだけが再臨すれば、全人類は一つの庭園において、一つの大家族をつくり、一家団欒して生活し得るようになっていくのである」(166ページ)と論じられています。

もし、祝福家庭を真の父母様と血統が繋がっていない養子養女と見るならば、それはキリスト教における「霊的救い」の次元にとどまっている立場であり、真の兄弟愛の関係を築くことはできません。

『統一教会の分裂』は、真の父母様の思想と異なることを平然と述べており、誤った主張をしているという事実が明白となります。そして、この「養子養女」の主張のとは顯進様の認識であるということであり、顯進様の認識自体が真の父母様の思想と異なっているということが明らかなのです。

ちなみに、郭錠煥氏は「私たち養子・養女である祝福家庭は、直系の真のご子女様から認められなければ生きる道がないのです」(『祝福家庭』二〇〇〇年冬季号、110ページ)と語っています。このように真の子女を中心と考えて「生きる道がない」と述べます。しかし、真のお父様は、「先生が接ぎ木してやるのだから、先生を通して完成基準に上る道ができるのです。……真の父母と一体となっていけば、無難にその峠は通過しま

す。真の父母を離れた場合には、行く道がありません」(『訪韓修鍊会御言集』74～75ページ)と語っておられ、どこまでも「真の父母」が中心なのであり、父母によって生かされるということとを知らなければなりません。祝福家庭は血統転換され、真の父母と血統がつながっているのです。祝福家庭を養子養女と述べる郭氏の言説は、真の父母様のみ言と食い違っています。

問題点⑤―創始者の使命は特定の宗教の創設ではない

まず、問題の『統一教会の分裂』(日本語訳)の内容を引用します。

「第四に文顯進は、自分の父である創始者の使命を特定の宗教や特定の教派の創設ではなく、『真の父母と真の家庭の実体的な基盤を通じて、人類を天の血統に転換させることによって人類救援を実現すること』と規定する」(64ページ)

確かに、真のお父様は、次のように述べています。

一九五四年に、私は韓国のソウルにおいて正式に統一教会を創設しました。一九五四年の五月一日に……北鶴洞の小さな家で看板を掲げて出発したのです。私は教派をつくらうとしませんでした。名前は『世界基督教統一神霊協会』なのですが、それをつくらうとしたものではありません。教派を超越した超教派的な面において運動をしようとしたのですが、受け入れなかったのです。それで仕方なく、統一教会をつくったのです。(『真の御父母様の生涯路程③』26ページ)

私は教会という言葉が好きではありません。仕方がなく教会

という看板を付けたのです。私は統一教会をつくって、『ああ、神様！統一教会をつくったので、私は誇らしく思います』と、そのようには思いません。統一教会という看板を掲げてはいませんが、この看板をいつになったら取り外すことができるか、という考えをもっています。(同、29～30ページ)

そのような意味から述べれば、「創始者の使命を特定の宗教や特定の教派の創設ではなく……」というのは間違いではありません。しかし、真のお父様は、統一教会を創立したこと自体を否定しておられるではありません。もし、上記のみ言を、統一教会を否定する意味で用いているとするならば、それは正しい主張とは言えません。お父様のみ言を引用します。

今日は協会創立二十七周年になる記念日です。……我々の団体が創立されたのはある個人の目的を達成するために創立されたものではありません。神様の**み旨の完成のために、神様の**み旨成就のために****この団体が始まり、出発されたことは言うまでもないので。(マルスム選集113～192)

皆様、侍義時代とは、神様に侍って暮らす時代です。……後天時代には、神様御自身が真の父母の姿で万人の前に顕現します。したがって、**真の父母に侍る統一教会の地位は、世の中のどのような力や勢力とも比較できない天の権勢として現れるようになるのです**。生きていらっしゃる神様を皆様が直接目で確認し、感覚で体恤できる圏内において、侍る生活を送る皆様を、誰が妨げることができるのでしょうか。(『平和神經』295ページ)

金鍾奭氏は、顯進様が、真のお父様の使命を「特定の宗教や特定の教派を創設することではない」としていること、さらにそれを強調します。しかしながら、お父様は統一教会創立二十七周年の記念日に語られたみ言で、統一教会の創立について、上記のように、「神様のみ旨の完成のため」、「神様のみ旨成就のため」であるとはっきりと語っておられるのです。お父様の使命とは、神様のみ旨の完成であり、そのために統一教会は設立されたのです。前述したように、『平和神經』でも、お父様は、「真の父母に侍る統一教会の地位は、世の中のどのようないかなる勢力とも比較できない天の權勢として現れる」と語っておられるのです。

さらに、問題となる『統一教会の分裂』（日本語訳）の部分を用います。

「文顯進は、『神様↓真の父母↓真の家庭↓拡大された真の家庭（祝福家庭）』と繋がる血統復帰の価値を固守しており、超宗教的な奉仕と理想家庭実現の為の平和理想世界実現運動を『One Family Under God』の名前で展開している。ところが、文顯進も真の家庭（創始者の直系家庭）の血統が全人類に伝授される（何らかの）儀礼としての手段が必要だったものと見られる。それ故か、二〇一五年六月に米国シアトルで祝福結婚式を主管したという。推測すると彼は、創始者が今まで示してきた血統復帰の為の伝統や儀礼を、普遍的で世界化された儀礼にデザインし直して引き継いでいくように見られる」（66ページ）

「文顯進は、最近GPFのほかに、FPA（Family Peace Association・家庭平和協会）を組織し、その使命を…（…神様を中心とした家庭の実現を図り、その家庭の世界的連合活

動を通じて世界平和創建に注力する国際的な組織である）」と決定したと言う」（314ページ）

「FPAの特性を……①FPAは、創始者が世界平和統一家庭連合を通して実現しようとしていたものを目標としている」（同）

UCI側を支持する人々は、統一教会や家庭連合を設立することが目的ではないと、ことさらに強調すること、真の父母と真の家庭（直系家庭）の実体的基盤を通じて天の血統に転換させるためにFPA（家庭平和協会）という別の団体を設立してもいいという口実を得たいがため、このように強調しているものと言えるでしょう。つまり、彼らが主張する「真の家庭のアイデンティティ」という誤った言説によって、真の子女様家庭が、真の父母の承認を得ないで「新たな団体」を創設し、子女様による「祝福」によって血統復帰らしきことを行おうとする行為を自己正当化するために、このように語っているものと考えざるをえません。

マルスム選集323巻に、真のお父様が文顯進様に対して語られた「警告」のみ言があります。以下、引用します。（…の中の文章は報告者の言葉です。

（私は今日、準備するものがあります、お父様）準備するものを私は知らない。（指導者会議と顯進様が今回の巡回に対して整理しなければなりません）整理して何をするの？（とても大きな事件ですので、我々は歴史的な記録として……）歴史的な記録が何なの？（統一教会の歴史の中で青年が統一教会の頂上ではありません。（「知っています。ですが我々なりに……」）我々なりに？ 自分なりにしては協道に行ってしまう。

「それはとても老婆心です」何、老婆心？ 誰が老婆心か？ 誰の前でそんな話をしているのだ？ 自分について言っているのか、先生について言っているのか？ 言葉はいいかげんに言っている。誰が老婆心を持っているのか、誰が？（顯進様は、お父様に対する栄光とお父様が……）その栄光が、父の栄光ではなく、神様の栄光となり、統一教会の栄光にならなければならぬよ。伝統をどこに立てるのか？ 父の伝統に従って、母の伝統に従って、三番目に息子である。それを知っているのか？ 母は伝統を立てる過程です。終わっていません。母の伝統を立てる前に息子の伝統を立てることができないことを知っているのか？ それを知っているのか？（はい、知っています）それなのに、そんなことを言うのか？ 收拾するとすれば、お母様がなさることとはなぜ收拾しないのか？（マルスム選集323-83、二〇〇〇年五月三十一日）

顯進は私が前に立たせているのです。立たせることで、先生より前面に押し立てて報告するなどというのです。分かりますか。何のことか？ 統一教会から党派をつくる輩（分派）になります、党派をつくる輩（分派）。党派をつくる輩（分派）です、分かりますか？ 自分たち同士で策を打ち出して、そこに先生を引きずり込んでこの世をどのように作ろうとするのか？ 恐ろしく、とんでもないことです。ですから、転換時代に精神を引き締めなければなりません。自分の立ち位置を知らなければなりません。（マルスム選集323-91-92、二〇〇〇年五月三十一日）

二〇〇〇年五月三十一日に語られた真のお父様の名言では、伝統とは、父と母が立てた伝統に従って息子が伝統を立ててな

ければならないと語られています。この二〇〇〇年当時の時点は、真のお母様が伝統を立てられるための過程におられ、お父様は、まだその過程は終わっていないと語っておられます。そして、ある報告者が、「顯進様のお父様に対する栄光」と顯進様がしておられることを賛美しましたが、それに対してお父様は、「神様の栄光であり、統一教会の栄光にならなければならない」と語っておられます。このことからしても、お父様の創設された統一教会とは、「真の父母に侍る統一教会の地位は、世の中のどのような力や勢力とも比較できない天の権勢として現れる」団体であるのです。

また、二〇〇〇年三月三十一日に世界大学連合理究会の世界会長に文顯進様が就任されました。しかし、同年五月三十一日のみ言で、真のお父様は、文顯進様をお父様よりも前面に押し立てて報告するようになってしまうと、「統一教会から党派をつくる輩（分派）になります」と語られて、今あるUCIの姿を予見するかにように心配しておられるのです。

実際に、真のお父様が心配されたとおり、今、「文顯進は、最近GPFのほかに、FPA (Family Peace Association・家庭平和協会) を組織」し、「創始者が世界平和統一家庭連合を通して実現しようとしていたものを目標としている」という別行動を取っているのを見たとき、かつて真のお父様が予見しておられたように、顯進様を中心とするUCIを支持する人々は、統一教会から別の党派をつくってしまう輩（分派）となり、誤った行動を執っていることを知らなければなりません。

『統一教会の分裂』が述べている、統一教会の核心アイデンティティ、および顯進様の数々のアイデンティティがことごとくみ言や『原理講論』の教えと異なっている事実を見たときに、真のお父様が生前、「顯進について行ってはならない」と、

なぜ私たちに語っておられたのか、その理由を改めて痛感せざるを得ません。

私たちは二〇一一年天曆四月二十三日（陽曆五月二十五日）に「真の父母様宣布文」を公表せざるをえなかった真の父母様のつらいご心情に思いをはせ、決してUCIを支持する人々が主張する「偽りのアイデンティティ」に惑わされないようにしなければなりません。そして、UCIを支持する人々が、真の父母のもとを離れて独自に行っている活動に与する（くみ）ようなことがあってはなりません。もうこれ以上、真の父母様を悲しませることがあってはならないのです。

九、UCIを支持する人々が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴く（5）

——書籍に散見する「み言改竄」の問題・その1

UCIを支持する人々が広める韓国語版の『統一教会の分裂』の韓国語版は、み言を継ぎはさることによって真意を歪曲させる「み言改竄」を行っており、日本語訳では、その歪曲した文章をさらに自分たちに都合の良いように悪意を持って「誤訳」しています。以下、同書（日本語訳）に含まれる「み言改竄」や「誤訳」の問題を暴いていきます。

（1）み言を誤訳し、お母様にはトラウマがあったと思わせる
—お父様が十七歳のお母様を利用して食べた？

『統一教会の分裂』は、真のお父様の次のみ言を採りあげています。

「統一教会は内外が一つになっていません。お母さん一人がどうしたわけか、そのことを残念に思っています。そうであってはならないのです。お母さん自身、今、何か先生に対し、少女の時に何も知らないことをよいことに、利用して食べたと考えているのです。そんな考えを未だに持っています。話せば、目をこのように大きく開けます。自分の目が上に上がるうとします」（127ページ。注、これは『統一教会の分裂』の翻訳文、マルスム選集597-163、二〇〇八年九月九日）

このみ言を根拠に、金鍾奭氏は、「この言及により韓鶴子が十七歳で創始者（注、お父様）に会い、血統復帰神話とも言うべき聖婚式を行った事件を天宙史的価値ではなく創始者に利用されたものと理解していたことが分かる」（128ページ。注、太字は教理研究院による）と主張しています。

そして、真のお母様が真のお父様から「利用されたもの」と理解していることに対して、お父様は「とがめていた」（127ページ）のだと述べます。

さらには、同書の後半部分において、「十七歳から救世主の妻として生きてきた人生そのものが彼女（注、お母様）にはトラウマであったという観点は、韓鶴子現象を正確に理解するのに必要な、失われたパズルのようなものだ」と筆者は見ている。

韓鶴子のトラウマが本格的に現われ、創始者との葛藤として発展したのは、統一教会分裂の隠された原因であった」（282ページ）などと主張しています。

しかし、以上のような主張は「み言改竄」と「誤訳」に基づいた、真のお母様をおとしめようとするための「虚偽の主張」にほかなりません。

金鍾奭氏は、『統一教会の分裂』（日本語訳）127ページで、前述した真のお父様のみ言を引用しており、そのみ言を、真のお母様が聖婚式についてお父様に「利用されたもの」と理解していたことを裏付けるみ言であるとしています。

しかし、このみ言をマルスム選集の原典で確認すると、これは、み言の前後の文章を隠して意味を誤読させ、読者を誤導しようとする悪意のあるものであることが分かります。

まず、そのみ言引用の部分とともに、以下、『統一教会の分裂』（日本語訳）から、その前後を含めて今一度、示しておきます。

「2008・9・9 モンゴル大会がまきに行われている最中のその日、創始者は意味深長な発言をした。統一教会が内外が一つになっていないと言及したのである。内とは『家庭』を指し、外とは『統一教会組織』を指していることは容易く理解できる。創始者が誰から何を聞いたのか正確には分からないが、創始者は韓鶴子をとがめていた。

『統一教会は内外が一つになっていません。お母さん一人がどうしたわけか、そのことを残念に思っています。そうであってはならないのです。お母さん自身、今、何か先生に対し、少女の時に何も知らないことをよいことに、利用して食べたと考えているのです。そんな考えを未だに持っています。話せば、目をこのように大きく開けます。自分の目が上に上がろうとします。』（注、マルスム選集597-163、二〇〇八年九月九日）この言及により韓鶴子が十七歳で創始者に会い、血統復帰神話とも言うべき聖婚式を行った事件を天宙史的価値ではなく創始者に利用されたものと理解していたことが分かる」（127-128ページ）

この『統一教会の分裂』の文章を疑わずに読めば、このみ言でいう「少女の時に何も知らないことをよいことに、利用して食べた」の部分は、真のお母様が真のお父様に対して「利用」されたという思いをもっておられ、それを、お父様が指摘しておられるかのように受け取れる内容になっています。ところが、実際のみ言を読むと、そうではありません。

また、金鍾奭氏は、真のお父様はそのことに対し真のお母様を「とがめていた」と述べますが、これもとんでもない悪意のある主張です。以下、虚偽を暴きます。

（2）マルスム選集の原典を読んで分かる真実

①金孝南・訓母様に対する警告のみ言

金鍾奭氏の間違った主張を理解するために、『統一教会の分裂』（日本語訳）が引用していない、前の部分のみ言を含め、文脈を踏まえながら正確に訳すと次のようになります。

今からは先生自体を守ってくれなければなりません。誰が守りますか？ お母様を守るべきです。訓母様は代理人です。そんな何か、切り盛りを考えることはできません。あるとしても、その思いは息子たち、後継者たちの前に譲り渡してあげなければなりません。そうなのです。

訓母様はそうになれば、寂しいでしょう！ お父様の愛を夫の愛と換えるなんて……！ サタン世界の愛！ 家ではお父様の愛、離れては夫の愛です。革命です。革命をしなければなりません。そのようにして、持つようになった全てのものを子孫万代、後代に先祖たちのものであるとしなければならぬのです。自分のものであると考えてはいけません。……（中略）

……統一教会は内外が一つになりませんでした。お母様一人をどうにかするとして、残念には思いません。そのようにしてはいけないのです。お母様自身が今、何か先生に対し、少女の時に何も知らない者をつかみ、利用し食べたと思っているというのです。そんな思いをいまだに持っています。話せば、目をこのように大きく開けます。自分の目が上がろうとします。(マルスム選集597-162-163)

真のお父様がこのみ言を語られた二〇〇八年九月当時、金孝南・訓母様が「清平摂理」を通して築いた基盤は、天城旺臨宮殿、天正宮博物館をはじめ諸施設、そして先祖解怨、先祖祝福、霊人祝福など、実に大きなものでした。また、金孝南・訓母様は、真のお父様のすぐそばで待てることのできる立場にもおられました。

そんな金孝南・訓母様に対し、真のお父様は、その立場を「誰が守りますか? お母様を守るべきです。訓母様は代理人です。……譲り渡してあげなければなりません」と語られました。そして、お父様のそばで「お父様の愛」を受けるのではなく、自分の夫のそばで「夫の愛」を受けなさいと語られたのであり、お父様(先生)自体は「お母様を守るべき」なのであって、「訓母様は代理人です」と指摘されたのです。そして、お父様は、「訓母様はそのようになれば、寂しいでしょう!」とも語られ、「持つようになった全てのものを「自分のものであると考えてはいけません」とおっしゃったのです。

金孝南・訓母様の立場は、真のお父様の前に、言わば「愛の基」として、お父様の「愛を独占するかのような位置」におられたと見るができます。ところが、自分が築いたと思っていた立場を手放して、お父様のそばを離れ、自分の代わりに真

のお母様が現れたことを通じて、金孝南・訓母様は「寂しい」という思いを感じるようになるだろう、と案じておられるのです。そして、そのような思いになる可能性をお父様はご存じであられ、そうならないよう、お父様は金孝南・訓母様を真の愛をもって論(まじ)そうとして語られたみ言であると言えます。

したがって、統一教会の「内」とは真の父母様を表し、「外」とは食口たち、特にここでは金孝南・訓母様を表しているものと考えられます。ゆえに真のお父様が「統一教会は内外が一つになりませんでした」と語られたのは、統一教会の食口たち、特に金孝南・訓母様が、真の父母様と一つになっていないという意味であると言えるのです。

ここで踏まえておくべきことは、「お母様一人をどうにかするとして、残念には思いません」、「そのようにしてはいけないのです」という二つの文章には、主語が省略されている点です。文脈から見ると、「お母様一人をどうにかする……」と「そのようにして……」の言葉の主語は、明らかに金孝南・訓母様であることが分かります。

すなわち、この言葉の意味は、金孝南・訓母様が、真のお母様を「どうにかする」、「そのように」するということです。そして、「残念には思いません」の主語は、真のお父様ということになります。

結局のところ、文章の流れ(文脈)を通してこの部分を見ると、「金孝南・訓母様がお母様に対して、嫌がるような何かを行ったとしても、お父様は残念に思いません。しかしながら、金孝南・訓母様はそのようなことをしてはいけません」という意味のみ言として、真のお父様が忠告を込めて語っておられるものであることが分かります。

以上のようなみ言であるにもかかわらず、『統一教会の分裂』

の翻訳文は、「統一教会は内外が一つになっていません。お母さん一人がどうしたわけか、そのことを残念に思っています。そうであってはならないのです」となっています。まるで、お母様が問題であるかのように述べることで、お母様をおとしめようとしているのです。これは、とんでもないみ言の改竄です。

②お父様は、誰かの報告に触れて語っておられる

次に、「お母様自身が今、何か先生に対し、少女の時に何も知らない者をつかみ、利用し食べたと思っていますというのです。そんな思いをいまだに持っています」の部分は、誰かが報告した内容であることが分かります。

事実、著者である金鍾奭氏自身も、「創始者が誰から何を聞いたのか正確には分からないが」（127ページ）と述べていることから、金鍾奭氏自身もこの部分が「誰かの報告した内容」であることを理解しているのです。

その「誰から何を聞いたのか……」とは、文脈から考えてみると金孝南・訓母様である可能性が高いものと言えます。したがって、誰か（おそらく金孝南・訓母様）が真のお父様に報告した内容を、お父様が全体の前で率直にお話をされたということになります。

したがって、この部分を分かりやすく補足を加えれば、『お母様自身が今、何か先生に対し、少女の時に何も知らない者をつかみ、利用し食べたと思っていますというのです。そんな思いをいまだに持っています』（という報告を受けたことを、真のお母様に）話せば……」であると言えます。

そして、そのように真のお父様が話すと、真のお母様は「目をこのように大きく開けます」と言われるのです。ここで、お母様が目を大きく開けられるのは、びっくりしたとき、驚いた

ときの表情なのです。これは、決して、「目をそらす」でも「目をむく」でもなく、目を「大きく開け」られるということです。すなわち、お母様は身に覚えのないことを言われて、びっくりしておられるのです。

結局、これらの文章の流れ、前後を踏まえて読んでみると、この報告内容は正しい情報ではなく、「誤った内容」であったことが分かるのです。それゆえ、「真のお母様は、身に覚えのない内容をお聞きになり、びっくりされて目を大きく開けられた」というわけです。

著者の金鍾奭氏は、この部分が誰かの報告した内容であり、真のお父様のお考えではないことを知っているはずですが、だからこそ、彼は、「創始者が誰から何を聞いたのか正確には分からないが……」などと述べているのです。にもかかわらず、「この言及により韓鶴子が十七歳で創始者に会い、血統復帰神話とも言うべき聖婚式を行った事件を天宙史的価値ではなく創始者に利用されたものと理解していたことが分かる」とし、「創始者は韓鶴子をとがめていた」などと、ありもしないことを述べているのです。

これは、事実をゆがめた、とんでもない記述です。そして彼は、真のお父様と真のお母様が葛藤しているかのように読者を誤導しようと、虚偽のストーリーを作文しているのです。

（3）聖婚式はお母様の誇り

では、真のお母様ご自身は、聖婚式に対してどのように思っておられるのでしょうか。結論から述べると、お母様は、真のお父様とご聖婚を、大変誇りに思っておられます。徳野英治会長は、お母様のみ言を次のように紹介しています。

「(二〇一七年) 四月十二日 (天曆三月十六日) に韓国の天正宮博物館で開催された『真の父母様ご聖婚五十七周年記念式』に参加させていただきましたので、まず、記念式やその前後に真のお母様が語られた内容を紹介します。

今回、真のお母様は、『今後、**聖誕、聖婚、聖和の三つの記念日**を柱として祝賀する」と明言なさいました。……真の父母様のご聖誕、ご聖婚、ご聖和は、全人類にとって、歴史上、どれほど大切な日か、言葉では言い尽くせないでしょう。……(略)……そのご聖婚に、ご聖誕、ご聖和を加えた三つの行事が、今後、全ての名節、記念日の中心として祝われることを覚えておいてください」(『世界家庭』二〇一七年六月号、17～18ページ)

以上のように、真のお母様は「聖婚」を貴い日として、大切に思っておられることがよく分かります。お母様が、「**聖誕、聖婚、聖和の三つの記念日**を柱として祝賀する」と語っておられるように、三つの大切な柱である聖婚は、真のお母様にとって誇りなのです。

したがって、金鍾奭著『統一教会の分裂』(日本語訳)が述べる「**韓鶴子が……聖婚式を行った事件を天宙史的価値ではなく創始者に利用されたものと理解していた**」とか、「十七歳から救世主の妻として生きてきた人生そのものが彼女(注、真のお母様)にはトラウマであった」という記述は、真のお母様をおとしめるための、極めて悪意ある「虚偽」であることが分かります。

ちなみに、真のお母様は、ご自身が十七歳のご聖婚のときに、固く「**決心**」されたことについて、次のように語っておられます。

私は、神様の摂理歴史を思いながら成長してきました。私が満十七歳でお父様に出会った時、「神様が大変な苦勞をして歩んでこられた蕩滅復帰摂理歴史を、私の代で終わらせる。私が終わらせる」と自ら**決心**しました。(天一国經典『真の父母經』192ページ)

私は、「お父様が再臨主として使命を完成、完結したと宣言するためには、私の力が絶対的に必要だ。私は誰にも任せることなく、私自ら責任を果たす。私が生きている限り、この**み旨は発展し、成功する。サタンを必ず追い払う**」と**決心**しました。(同、193ページ)

以上のように、真のお母様は真のお父様との「**聖婚式**」に際し、固く**決心**しておられたのです。そして、御聖婚五十七周年記念日の際には、「**原罪なく生まれた独り子、独り娘が、天の願いに従って小羊の婚宴を挙げた日です。天にとっては栄光、人類にとっては喜びと希望の日となったのです**」と語っておられます。このような、お母様の思いと「**決心**」の強さを誰よりもご存じであられたお父様は、その点について次のように語っておられます。

私がお母様を称賛するのではなく、お母様に良い点が本当に多いのです。素晴らしいのです。それゆえに、そのようなものをすべて見て、お母様として選んだのではないですか。顔を見れば分かるのです。慎ましいのですが恐ろしい女性です。一度**決心**すれば、最後まで自分一代でこの複雑な恨の峠をすべて清算するという**決心**が、私よりもお母様がもっと強いのです。先生は、今七十を超えたので、ごみ箱の近くに行きましたが、

お母様は、今ごみ箱を収拾してそれをすべて掃除することができ、主人になったので、先生よりもお母様をもっと重要視することができ、統一教会の食口になれば福を受けるのです。『生涯路程⑩』351〜352ページ)

このように、真のお母様は「聖婚」に際して、真のお父様の前に「お父様が再臨主として使命を完成、完結したと宣言するためには、私の力が絶対的に必要だ。私は誰にも任せることなく、私自ら責任を果たす」と固く決意しておられ、お父様もそのようなお母様をごらんになって、「お母様に良い点が本当に多いのです。素晴らしいというのです。……一度決心すれば、最後まで自分一代でこの複雑な恨の峠をすべて清算するという決心が、私よりもお母様がもっと強いのです」と語られ、お母様を称賛しておられるのです。

したがって、金鍾奭氏が真のお母様について述べている「少女の時に何も知らないことをよいことに、利用して食べたと考えている」、「17歳から救世主の妻として生きてきた人生そのものが……トラウマであった」などという記述は、完全な作り話に過ぎません。

このような「み言改竄」や意図的な「誤訳」が散見するこの書を広めていくUCIを支持する人たちは、真のお母様に対する信仰が崩壊した人であると見ざるをえません。

また、真のお父様に対する信仰についても同様であると言わざるをえません。なぜなら、お父様を心から信じ、敬い、侍る気持ちの満ちた人には、このように平然と「み言改竄」や「誤訳」をするなどということはありえないはずだからです。

特に、問題なのは、この著者や翻訳者たちが、み言の原典（マルスム選集）に当たってみることで、その意味を知っていないが

らも、その意味をわざと隠したり、改竄したりしているという点です。

十、UCI（いわゆる「郭グループ」）側の「独生女」批判に関する見解

UCI側がしきりに騒ぎ立てている「独生子・独生女」批判に関して、真のお母様ご自身が公式的に語られたみ言は、以下の通りです。

天一国五年天曆三月十六日（二〇一七年陽曆四月十二日）、「天主人真の父母様ご聖婚五十七周年記念式」が韓国・天宙清平修鍊苑で開催されました。その式典で、真のお母様は、文鮮明・韓鶴子ご夫妻の「聖婚記念日」について次のように語られました。

しかしきょう、この日、万難を克服して独り娘は……。イエス・キリストは二千年前、原罪なく生まれました。独り娘も、原罪なく生まれたのです。これが真実です。原罪なく生まれた独り子、独り娘が、天の願いに従って小羊の婚宴を挙げた日です。天にとっては栄光、人類にとっては喜びと希望の日となったのです。『世界家庭』二〇一七年五月号、6ページ)

真のお母様ご自身が、公式の場で全世界の食口に向けて直近で語られたみ言は、上述のとおり、聖婚記念日とは「原罪なく生まれた独り子、独り娘が、天の願いに従って小羊の婚宴を挙げた日」というものです。

ここで語っておられる「小羊の婚宴を挙げた日」が、文鮮明・韓鶴子ご夫妻の「聖婚記念日」を指しておられることからすれ

ば、「原罪なく生まれた独り子」とは文鮮明師のことを、そして「原罪なく生まれた……独り娘」とは韓鶴子総裁のことを語っておられることは明白です。

真のお母様は、真のお父様もお母様も共に原罪なくお生まれになり、「小羊の婚宴を挙げた」とはつきりと語っておられるのです。

すなわち、真のお母様が、公式の場で語っておられる「独生子・独生女」とは、「原罪なく生まれた独り子、独り娘」を意味しています。

したがって、UCI側が、しきりに流している「独生子・独生女」批判に関する内容は、上述のような真のお母様のみを全く無視した、お母様をおとしめるための悪意に満ちた批判に過ぎません。

十一、アブラハム、イサク、ヤコブの論理の悪用について ——再臨主に、次の代への延長摂理はない

二〇一四年六月十八日、神山威氏（故人）は、郭グループが釜山で行った集会で、次のように語りました。

「基元節は、何をしなければならなかったのか。……神様の結婚式がなされなければならなかった。お父様が蘇生、長成、完成、最後の神様の結婚式を、真のお父様がどんなにその時を待ったと思います？……基元節は一月十三日と言いましたよ。……しかし、お父様は待ちに待ったその日を迎えられず、霊界に行かれました。どんなに無念だったと思います？……アブラハムが、縦的な歴史の失敗を象徴献祭で蕩滅することにより、旧約時代の出発がなされなければならなかったが、それが失敗

した。それを横的に蕩滅するため、アブラハム、イサク、ヤコブと横的に（摂理が）延長された。……それと同じように、真のお父様、次のお子様、そして三代まで。一代、二代、三代で神の家庭、本当の意味での基元節を迎えなければならぬと、私は考えております」

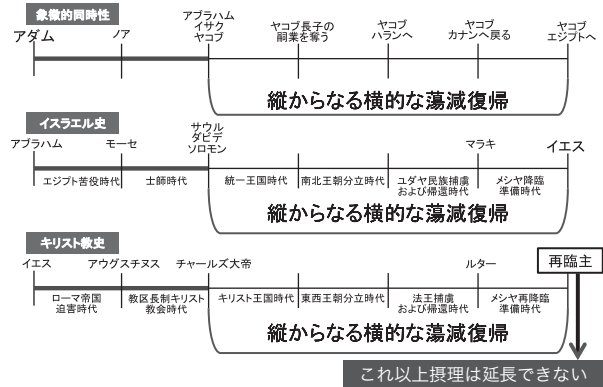
神山氏は、真のお父様は使命を全うできずに聖和された結論づけ、ちょうどアブラハムの象徴献祭の失敗によって、神の復帰摂理がアブラハム、イサク、ヤコブへと延長されたように、現代でも、摂理が真のお父様、子女様、お孫様へと延長されるのだと主張します。

しかし、これは、『原理講論』が論じるアブラハム、イサク、ヤコブの「縦からなる横的な蕩滅復帰」（442ページ）の論理の悪用であり、誤った言説です。このサンクチュアリ教会およびUCIを支持する人々の言説は、いずれも『原理講論』が論じている「原理」から逸脱した非原理的主張です。

「摂理的同時性の時代の対照表」を見れば分かるように、アダムから太い線で示されたアブラハムまでが本来の摂理です。しかし、アブラハムが象徴献祭に失敗したため、摂理はイサクを経てヤコブへと延長されました。『原理講論』には、「もしアブラハムが『メシヤのための家庭的基台』を、み意にかなうように立て得たならば……その基台の上でメシヤを迎えるはずであった。……（しかし）象徴献祭に失敗することにより……挫折してしまつた」（281〜282ページ）とあります。

これと同様、イスラエル史でも、サウル王のとき「イスラエルの選民たちが、サウル王を中心とするその『信仰基台』の上で、神殿を信奉していくこの国王を絶対的に信じ従ったならば、彼らは『実体基台』を造成して『メシヤのための基台』をつくり得たはずであった」（『原理講論』474ページ）とあるよう

摂理の同時性の時代の対照表



になった」(457ページ)というのです。

ゆえに、イスラエル史におけるサウル王以降の歴史は「縦からなる横的な蕩滅復帰」の歴史であり、これ以上、延長できない状況でイエス様を迎えている事実を知らなければなりません。そして、「ユダヤ人たちが……彼らの責任を果たさなければ、やむを得ずイエスは十字架で死なれて、第三のアダムとして再臨されなければならない……(ノアの鳩の摂理に)記録されている七日という期間は……摂理的なある期間が過ぎたのちでなければ、メシヤの降臨はないということを見せてくださった」(308〜309ページ)とあるように、メシヤが勝利できないときは、摂理を直ちにやり直すことはできません。

また、イスラエル史と同様に、キリスト教史でも、『原理講論』

に、その基台の上でメシヤを迎えていました。しかし、サウル王の不信で「摂理は成し遂げられずに、アブラハムのときと同じく、これらを縦からなる横的蕩滅復帰期間として復帰するため、統一王国時代一二〇年、南北王朝分立時代四〇〇年、イスラエル民族の捕虜および帰還時代二二〇年、メシヤ降臨準備時代四〇〇年を立てて、初めてメシヤを迎えるよう

に「チャールズ大帝が、この基台の上で、キリストのみ言を信奉し、キリスト教理想を実現していったならば……『再臨されるメシヤのための基台』も、成就されるはずであったのである。もし、このようになったならば……その基台の上にイエスが再び来られて、メシヤ王国をつくることができた」(475〜476ページ)とあるように、再臨主はそのときに来ていました。しかし、「国王が神のみ旨を信奉し得ず、『実体献祭』をするための位置を離れてしまったので、実体基台は造成されず、したがって、『再臨されるメシヤのための基台』もつくられ」(476ページ)ず、摂理はアブラハムのときと同様、延長されて現代に至ってしまったのです。

ゆえに、キリスト教史においても、チャールズ大帝以降の歴史は「縦からなる横的な蕩滅復帰」の歴史であり、これ以上、延長できない状況で再臨主を迎えている事実を知らなければなりません。そして、仮に、真のお父様が勝利できなかった場合、その摂理を直ちにやり直すことはできないのです。すなわち、アブラハム、イサク、ヤコブの摂理のように、真のお父様、子女様、お孫様へと延長することはできません。にもかかわらず、サンクチュアリ教会やUCIを支持する人々のように摂理を「延長できる」と考えることは、「原理」から逸脱した非原理的言説です。

『原理講論』は、「再臨主はいくら険しい苦難の道を歩まれるといっても、初臨のときのように、復帰摂理の目的を完遂できないで、亡くなられるということはない。その理由は、神が人類の真の父母を立てることによって、創造目的を完遂なさろうとする摂理は、アダムからイエスを経て再臨主に至るまで三度を数え、……再臨のときには、必ず、その摂理が成就されるようにになっている」(428ページ)と論じており、再臨主の摂

理においては、これ以上、延長があつてはならないのです。

このような「原理」を熟知しておられる真のお父様は、「偽りの父母から血肉を受け継ぐことによって、亡国の環境となつてしまったサタン世界の霊界と肉界を……修理すべき責任を持った『真の父母』という人が来て、神様のように数千年間かけて役事するのではありません。アダムが一代で完成することができなかったのです、（先生）一代で解決しなければなりません。ですから、それは、どれほど途方もないことでしょうか？」

（『ファミリー』二〇〇一年六月号、9ページ）、「歴史を一代で解決しなければなりません。一代です、のです。分かりますか？ 何代ではありません。先生一代で解決しなければなりません。アダム家庭が、一代で勝利できなかったことを歴史的に総蕩滅して、先生一代で整備しなければならぬのです」（同、13ページ）と深刻に語っておられるのです。

それゆえ、真のお父様はみ旨を必ず成就しようと「不眠不休」で生涯を走り抜けられ、「歴史的に総蕩滅」した勝利を打ち立てられたがゆえに、二〇一二年八月十三日、「すべて成し遂げました」（天「国」經典『天聖經』1645ページ）と最後の祈禱をしておられるのです。この「すべて成し遂げました」は、ご自身の生涯と復帰歴史全体を総括する歴史的宣言であることをご知らなければなりません。

にもかかわらず、真のお父様が「未完のメシヤ」であるかのように論じ、お父様をのようにさせた元凶は真のお母様であるかのように批判することは、人類歴史上、かつてなかった最大・最悪の「不信」であると言わざるをえません。

サンクチュアリ教会やUCIを支持する人々は、真のお父様が「真の父母」としての勝利基準を立てられずに聖和されたと考えています。お父様が「すべて成し遂げました」と語って

おられるように、お父様は勝利をして聖和されたと応答しても、それをかたくなにはねのけ、「いや、子女様はこう語っておられる」と子女様の言葉のほうを優先して、自分たちの主張を一切曲げようとはしません。

真のお父様は、世界平和統一家庭連合時代は「長子と次子は母親の名のもとに絶対服従しなければならぬのです。服従するようになれば父と連結します」（『主要儀式と宣布式Ⅲ』151ページ）と命じておられます。

この真のお父様のみ言を軽んじられる子女様を擁護する彼らの心の根底には、意識しようがしまいが、真の父母の勝利圏を否定している子女様（UCIの場合は顯進様、サンクチュアリ教会は亨進様）の「不信」を正当化し、子女様の今の立場を擁護せんとする非原理的な動機があるからにはなりません。私たちは、このような不信と「不純な動機」による非原理的な行動を、一掃しなければなりません。

UCIを支持する人々の言説の誤り No.1 定価100円+税

2017年11月1日 初版第1刷発行

発行 世界平和統一家庭連合
発売 株式会社 光言社
〒150-0042 東京都渋谷区宇田川町37-18
電話 03 (3467) 3105
<https://www.kogensha.jp>
印刷 株式会社 ユニバーサル企画

©FFWPU 2017 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。



2010000234914